

中東紛争

それは世界最終戦争(アルマゲドン)を招くのでしょうか？

なぜ中東にこのような憎しみがあるのでしょうか？ 紛争の本当の根源は何でしょう？

聖書の予言は、この最終結末について何を語っているのでしょうか？

—ガーナー・テッド・アームストロング

なぜアラブ人はユダヤ人を憎むのでしょうか？ なぜ多くのユダヤ人がアラブ人を憎むのでしょうか？ エルサレムの無力な市民に対する爆撃、刺殺や銃撃、ロケット攻撃といった紛争やテロ行為が、どうして絶え間なく続くのでしょうか？ アラブ人とユダヤ人の間の、この長期に渡る紛争の本当の根源を理解するためには、エルサレムとパレスチナの歴史を知る、つまり、その地に住む人々の民族や宗教の根源を理解する必要があります。さらに重要なことは、パレスチナやエルサレムでこれから起こる出来事が、あなたが住んで居る所、そしてあなたの人生にどのような影響を及ぼすのかという、聖書の予言を理解することが必要です。

報道機関は常に「領土と平和の交換」を報じ、領土問題に固執しているようです。何億ともいえるアメリカ人が、「和平協定」の妨害者としてユダヤ人に嫌悪感を持っています。報道機関の多くは「イスラエルの、わずか 13 パーセントの領土」が地域に平和をもたらすだろうと堂々巡りの議論をしているのです！ 紛争の真の根源、真相についてなんと無関心なことでしょうか！ テレビであなたにニュースを伝える若い記者の多くは、イスラエルが 6 力国のアラブ諸国連合軍と戦った当時、まだ産まれてもいませんでした。彼らの多くは、ゴラン高原、ガザ地区、エルサレム旧市街を含むヨルダン川西岸の占領をもたらしした有名な「6 日間戦争」が戦われた時に産まれていなかったのです。アメリカの報道機関は、パレスチナアラブ人が常に主張する「占領地域」という言葉をただそのまま繰り返してきたのと同然なのです。ユダヤ人と敵対するアラブ近隣諸国との緩衝地域の「安全」についてユダヤ人が話しても、多くの人が無関心なようです。歴史に対する無知、簡単にだまされてしまうこと、宣伝、こうした事全てがアメリカの世論形成の一端を担っています。そして、その世論の多く、あるいは殆どがひどく歪曲されています。

今こそ真実を理解する時なのです！

双方の民族が、古代の歴史に基づいてパレスチナの土地を争っており、ユダヤ人国家イスラエルの場合は、聖書に基づいています。

ユダヤ人の起源は、有史以来エルサレムにあります。エルサレムは、かのエデンの園があった地と推測されてきただけでなく、ユダヤ人の伝承では、有名な「岩のドーム」がある丘がアブラハムがイサクを神に捧げようとした地であるとされています。現在そこにはアラブのモスクが建っています。エルサレムに関するユダヤ人の主張は、ダビデとソロモンの時代を根拠としていますが、一方、多くのアラブ人は、彼らの先祖こそ、出エジプト後にイスラエルがパレスチナを「侵略」した際に土地を奪われたのだと信じています。

イスラム教徒は、岩のドームを彼らの預言者モハメットが「天に昇った」場所だと信じています。キリスト教徒はベツレヘム、エルサレムとその「聖地」を、聖なるキリストの死、埋葬、復活の地として崇拝しています。

エルサレムは、人類の三大一神教の非常に重要な聖地なのです。エルサレムは、「平和」にちなんで名づけられています。(ダビデの時代以前にそこに住んでいたエブス人にちなんだ)「エブス」とは「平和」を意味する「サレム」に由来しているとされています。アブラハムを迎え、アブラハムが全ての物の十分の一を与えた「サレムの王」メルキゼデクは、祭司であると共に王であり、キリスト(救世主)のような、あるいは、まさにキリスト(救世主)となった神性の人とされており(ヘブライ人への手紙 7 章 1-3 節)、エルサレムがその舞台となった土地なのです。

歴史上、エルサレムは平和の都市というよりも、流血や紛争、戦争の都市となってきました。イエス・キリストは、エルサレムに彼が預言なされた「大いなる患難」が起こり、大規模な破壊がもたらされるだろうと警告されました。

なぜテロが起こるのでしょうか？

なぜ多くのアラブ人がこれ程激しくユダヤ人に怒りを覚えるのでしょうか？ 主要な報道機関は、イスラエルで本当に起こっていることが単なる独立闘争だという思い込みを助長しているように思えます。アメリカ合衆国は独立戦争を戦ったのではなかったのでしょうか？ 世界中の国々は、自分達の宗教や哲学、政治、社会、経済の目的を追求するために、他国の支配から解放されたいと思っ

てこなかったのでしょうか？ 一般人の方には、イスラエルでの市民の無差別殺人は、イスラエルがヨルダン川西岸を「占領」し続けている、すなわち、イスラエルが、(それがユダヤ人の私有地であるにも拘わらず)パレスチナアラブ人が主張する土地に住宅を建設し続けたり、ゴラン高原を占領し続けたり、エルサレムについての交渉を拒否し続けているからだ、という明らかな原因による当然の結果だと思われるかもしれません。イスラエルがアラブ 5 カ国の軍隊に攻撃され、目ざましい勝利をおさめた結果として紛争地域を占領するようになってから 30 年が過ぎました。それにもかかわらず、パレスチナアラブ人やシリア人は、イスラエルが軍事力によって勝利したエルサレム東部を含む全て

の土地を放棄するよう求めています。しかし、イスラエル側からすると、これらの、北はガリラヤ湖を見下ろすゴラン高原、南はイスラエルの中心を突き刺す短剣のようなガザ地区、西はエルサレムとヨルダン川西岸地区といった土地は、アラブ軍の機甲部隊にとって危険な攻撃開始地点となってきたのです。戦争以前は、当時のどの地図も示していたように、イスラエルはラトランから地中海にかけた一突きで二つに分断されてしまうような細い腰のような地形をしていました。

イスラエル軍指揮官やイスラエル政府は、アメリカがカリフォルニア、ネバダ、アリゾナ、ニューメキシコ、テキサスやフロリダ州の一部をメキシコへ返還することなど考えていないのと同様にこれらの惨事を引き起こす国境を返還するという考えに対して、折に触れて不快感を示してきました。過去に戻って、この一触即発の問題の双方の立場を理解してみましょう。中東の対立は、新しい大規模な中東戦争へと発展し、各大国をも巻き込むことで、最終的には世界最終戦争(アルマゲドン)をも引き起こしかねないのです！

パレスチナの歴史

「パレスチナ」という言葉は、古代イスラエルと常に事実上の戦争状態にあった「ペリシテ人」という民族の名前に由来しています。ダビデが投石器で投げた石で倒した巨人ゴリアテはペリシテ人でした。ハムの二番目の息子、ミスライムが、カスルヒム人を生み、「ペリシテ人はその中から発祥した」のです。(創世記10章14節) 現在のパレスチナアラブ人が「ペリシテ人」だと断言するのは誤りでしょう。「ペリシテ人」はアラブ人の祖先ではありません。この地域の歴史は、ノアの3人の息子からうまれた多くの様々な民族や、数多くの戦争、アッシリア、バビロニア、エジプト、ペルシア、ギリシャ、ローマ、トルコ、ヨーロッパなど様々な大国が、かわるがわる勝利をおさめてはパレスチナを侵略したという、年代記なのです。近代では、セルジューク、オスマントルコ、そして二度の世界大戦後はイギリスによって支配されました。

ペリシテ人は、エジプト第20王朝の政権を脅かした、シリア北部、小アジア、レバント(レバノン)からなる同盟国の民族、「プーラサティ族」の子孫だといわれています。

エジプトの記念碑(モニュメント)では、プーラサティ族は、リキュア人やミューケーナイ人と似た独特の羽のついた頭飾りをつけて描かれています。ペリシテ人の起源については、若干あいまいな部分もあります。聖書は、彼らは「カフトル」からの移民だとしています(アモス9章7節)。彼らはモーセの時代やアブラハムのイサクに関する試練の時よりも前にすでにその地にいたので、彼らが「アラブ人」であったと判断するのは不可能です。

「こうして彼らはベエル・シェバで契約を結び、アビメレクは立ち上がり、彼の軍隊長ピコルとともにペリシテの地に帰った」

「そして、アブラハムは、ベエル・シェバに一本のぎよりゆうの木を植え、永遠の神、主の名を呼んだ」

「そして、アブラハムは何日もペリシテに滞在した」(創世記21章32-34節) 彼らは、自分たちの名前を土地に名づけましたが、彼らはイシュマエルの子供ではありません。ペリシテ人は、繰り返し聖書で言及されています。ヘイスティングス聖書辞典は次のように述べています。「政治的には、彼らには5つの主要都市、アシュド、ガザ、アシュケロン、ガト、エクロンがあった(サムエル記上6章17節、ヨシュア記13章3節、ゼバニヤ書2章4-7節 等)… 彼らの政治的組織は独特で、…特に軍隊の優秀さは際立っていた。弓の射手、重装備の歩兵隊、何百何千もの組織等の記述など、彼らの組織の詳細は聖書の様々な部分から推測できる。[サムエル記上31章3節、歴代誌上10章3節、サムエル記上29章2節] 戦車や騎馬について述べられているもの、こうした記述は、彼らが常に歩兵隊で戦っていたかのような印象を与える。戦死した敵兵の身体への残酷な扱い[サムエル記上31章、歴代誌上10章]や女性達が勝利をおさめて戻ってきた戦士たちを歓迎する栄誉についても述べられている。しかし、こうした詳細よりも、この小さな、わずか数百平方マイルの領土の国が、繰り返しイスラエルを征服し、何世代にもわたって服従させてきたという事実の方がはるかに重要である」(同書3巻 844-845 ページ)

ダビデがゴリアテに勝利した記述では、彼らが冶金を完成させていたことがわかります。ゴリアテは、ヨーロッパ人のような鎖かたびらを着て、真鍮のヘルメットをかぶり、巨大な鉄の先端がついた大きな槍を持っていた。(サムエル記上17章4-7節) 創世記10章の「民族の系図」は、ペリシテ人の起源はおそらくハム族であり、ゆえに肌は浅黒いというよりむしろ黒いとしています。多くの専門家は、その名前自体はセムを起源として考えています。興味深いことに、ヘイスティングスは、「イスラエルの統一を阻止しようというのは、ペリシテの政策だった。ダビデがユダの王であり、はるか北に競争相手(ライバル)の王がいる限り彼らは満足なようだ。イスラエルが分断されていれば、ペリシテの優位は揺らがない。しかし、ダビデが12の部族を支配しようと企てると、ペリシテ軍はただちに進軍する。[サムエル記下5章17節] かつてサムエルが裁きを行った際も同様の状況であった」[サムエル記上7章7節]と述べています。(同書845 ページ)

現在の「ガザ地区」は、ペリシテの5つの主要都市のひとつから名づけられています。ペリシテ人は、東からきたアラブ人とは全く異なる民族だったということに注意してください。「ペリシテで最も南に位置する有名な町「ガザ」は、エドム(トルコ)から南アラビアに至る、ペリシテとは概して友好的なベドウィン族のキャラバンの最終地だった。アフリカの前哨基地、アジアへの玄関で、[G.A.スミス]エジプトの侵略の出発点でもあり、フェニキアやシリアへの海の道を封鎖する、ラキシュの次に重要な要塞だった。比較的小さく、半砂漠地帯のこのユダの地の状況は南東のエドム人やアラビア民族、西のペリシテ人との関わりによって左右されるだけに、ガザの立場と

貿易中心地とのつながりを理解する必要がある」(ブリタニカ百科事典 第11版 21巻 402 ページ)

聖書も、ペリシテ人とアラビア人を同様に区別しています。「ペリシテ人の中にもヨシャパテに贈り物と貢物の銀を携えて来るものがあり、アラビア人も彼に羊の群れ、雄羊7千7百頭、雄山羊7千7百頭を携えてきた。

こうして、ヨシャパテはしだいに並外れて強大になり、ユダに城や石の町々を築いた。

彼はユダの町々で多くの仕事をし、エルサレムには勇敢な戦士達をかかえていた」(歴代誌第二 17 章11節)

聖書では、パレスチナの最古の住民は、ユダヤ人とアラブ人両方の祖先であるアブラハムから始まったとされています。アブラハムは「エベル」の子孫つまりヘブライ人です。神はアブラハムに言われました。「あなたは生まれ故郷、父の家を出て、私が示す地へ行きなさい。

私はあなたを大いなる国民とし、あなたを祝福し、あなたの名を高めよう。あなたの名が祝福の源となるように」(創世記12章1、2 節) ある意味、聖書全体は「一人の人間からでた家系」といえるでしょう。アブラハムの生涯から始まり、とぎれることのない糸でつながりながら、オリーブ山の予言やヨハネの黙示録で描かれているキリストの預言で終わるのです。

キリストのパリサイ人への言葉、「あなたがたはアブラハム、イサク、そしてヤコブが神の国に入るのを見るでしょう、そしてあなたがたは外に放りだされるだろう」とは、アブラハムは神の国でキリストと一緒にいる事を明確に示しています。アブラハムは「信仰の父」とも呼ばれ、ユダヤ人からもアラブ人からも深く崇拜されています。

長年まちわびた一人息子をキリスト神に捧げるよう求められた際に、アブラハムの信仰が極限まで試されました。神は言われました「これがあなたと結ぶ私の契約である。あなたは多くの国民の父となる。」

「あなたは、もはやアブラムではなく、アブラハムと名乗りなさい。私があなたを多くの国民の父とするからだ。」

「私は、あなたをますます繁栄させ、諸国民の父とする。王となる者たちがあなたから出るだろう。」

「私は、あなたとの間、また後に続く子孫との間に契約をし、それを永遠の契約とする。そしてあなたとあなたの子孫の神となる。」(創世記 17章4-8節) アブラハムの信仰 に対する大いなる

しれん のち かみ むじょうけん やくそく わたし かみ みずか ちか
試練の後、神はアブラハムに無条件の約束をされました！ 私は「神」として自 らに誓おう、あな
たがこのことを行い、一人息子を惜しまなかったのだから」

しゆくふく てん ほし うみ べ すな しそん ふ
「あなたを祝福し、天の星のように、また海辺の砂のように、あなたの子孫を増やそう。そして、あ
なたの子孫は敵の城門を勝ち取るだろう」

しそん ちじょう こくみん しゆくふく わたし こえ したが
「あなたの子孫が地上のあらゆる国民を祝福するだろう。それはあなたが 私 の声に従ったからで
ある」

かれ わかもの もど とも た あ む
「アブラハムは、彼の若者たちのもとへ戻り、共に 立ち 上がりベエル・シェバへ向かった。アブラハ
ムは、ベエル・シェバに住んだ」(創世記22章16-18節)

ち え はなし かみ えいえん やくそく れきしじょうもつと きょうみ ぶかい
アブラハムがパレスチナの地を得る 話と神の永遠の約束は、歴史上 最も興味深いもののひとつ
です。アブラハムの生涯を理解することによってのみ、中東の歴史について本当の意味で正しい
かんが なた ばくはつじ けん ご おこな
考え方をすることができます。テル・アビブでの爆発事件後に行われたイスラエルのベンジャミン・
ネタニヤフ首相との共同記者会見で、ヨルダンのフセイン国王は、ユダヤ人とアラブ人をともに「ア
ブラハムの子供たち」と言い表しました。

じん だれ
アラブ人とは誰なのでしょう？

こども くにごに ち よげん まご
アブラハムの子供たちはあらゆる国々へ散らばるよう預言されていました。アブラハムの孫ヤコブ
のな は別名イスラエルとなり、(海辺の砂のように)何億もの子孫となって、地上いたるところへ
ち ぶすこ みんぞく そ まご
散らばりました。アブラハムの息子イシュマエルは、アラブ民族の祖となりました。アブラハムの孫
でヤコブの兄であるエサウは、一般に後のトルコ人と考えられているエドム人の祖となりました。

がっしゅうこく えいこく こだい じん じん しょうたい もつと
アメリカ合衆国と英国、古代ヨーロッパ人、ドイツ人の正体(アイデンティティ)について最も
きょうみ ぶかいしんそう でんわ よげん
興味深い真相については、(903)561-7070 にお電話いただくか、「預言におけるヨーロッパとアメ
リカ」という本のコピーをお手紙でお求めください。

つま ふにん たい しつぼう じん おんなどれい こども
アブラハムの妻サラの不妊に対する失望から、アブラハムはエジプト人の 女 奴隷、ハガルに子供
を生ませる決断をします。このことについては、サラの強い主張ではなかったとしても、彼女の
どうい つま こども う かのじょ
同意がありました。「アブラムの妻サライには子供が生まれなかった。彼女には、ハガルという
じん おんなどれい
エジプト人の 女 奴隷がいた」

い しゅ わたし こども さず わたし おんなどれい
「サライはアブラムに言った。主は 私 に子供をお授けになりません。私 の 女 奴隷のところへ
はい わたし かのじょ こども え ねが
入ってください。私 は彼女によって子供を得られるかもしれません。アブラムはサライの願いを
き い
聞き入れた」

「アブラムの妻サライは、エジプト人の女奴隷ハガルを連れてきた。それはアブラムがカナン^ちの地に^す住んでから10年後^{ねんご}のことだったが、サライはハガルを夫^{おつと}アブラムの妻^{つま}とした」一夫多妻は^{いっふたさい}正当な^{せいとう}ことで、様々な^{さまざま}部族^{ぶぞく}の高貴^{こうき}な人々^{ひとびと}や裕福^{ゆうふく}な人々の間^{あいだ}ではよく行^{おこな}われていることでした。後^{のち}にサラとなったサライは、ハガルは単なる代理母にすぎず、生まれた子供は自分の子供なのだと考^{かんが}えていました。

「アブラムはハガルのところに入り、彼女は身ごもった。彼女は自分が身ごもったことがわかると自分の女主人^{おんなしゅじん}を軽^{かろ}んじた」これは、まさに人間^{にんげん}の本性^{ほんしやう}をあらわしています。ハガルは自分が本当^{ほんとう}の妻^{つま}だと感じたのです。アブラハムの子供をみごもったことに誇^こり^{ほこ}に思い、将来自分と自分の子供が重要な立場を占めるだろうということを明らかに認識したのです。サラが排除され、ハガルが優位となりました。苛立ちと不妊の末、サラは自らの家の中でよそ者も同然となってしまうしました。

「サラはアブラムに言った。私が不当な扱い^{ふとう あつか}をうけたのはあなたのせい^{せい}です。私は自分の女奴隷^{おんなしゅ}をあなたの胸^{むね}に与え^{あた}ました。彼女は自分が身ごもったのがわかると、私を軽^{かろ}んじました。主^{しゅ}が私とあなたの間^{あいだ}を裁^{さば}かれますように」(創世記 16章1-6節)

アブラハムはサラを深く愛^{ふか あい}していました。彼はサラにハガルを好きなようにするよう言^いいました。結局^{けっきよく}、ハガルはサラの女奴隷^{おんなしゅ}に過ぎないのです。サラが、ハガルを厳^{きび}しく扱^{あつか}い始^{はじ}めたため、ハガルは逃^にげ出^だしました。主^{しゅ}の使^{つか}いは、ハガルに^{もど}るよう^いに言^いいました。

ここで、神^{かみ}がハガルと交^かわした、彼女の息子^{かのじよ むすこ}に関する約束^{やくそく}は、多くのアラブ国家の起源^{おお こっか きげん}であることに注意^{ちゆうい}してください。「主^{しゅ}の使^{つか}いはハガルに言^いった。私はあなたの子孫^{しそん}を数^{かず}え切^きれないほど多^{おほ}く増^ふやす」

「主^{しゅ}の使^{つか}いはまた彼女に言^いった。あなたは今身^{いま み}ごもっており、男^{おとこ}の子^こを産^うむだろう。その子^こをイシュマエル^{かみ き}（「神^{かみ}は聞^きかれる」という意味^{い み}）と名^なづけなさい。主^{しゅ}があなたの苦悩^{く のう}を聞^きかれたのだから」

「彼は荒々しい男^{かれ あらあら}になるだろう。彼はあらゆる人^{おとこ}にこぶしを振^ふりかざし、あらゆる人^{ひと}が彼^{かれ}にこぶしを振^ふるうだろう、彼は兄弟^{かれ きょうだい}すべてに敵対^{てきたい}して暮^くらすだろう…そして、ハガルはアブラムの息子^{むすこ}を産^うみ、アブラムは、ハガルが産^うんだ息子^{むすこ}をイシュマエルと名^なづけた」

「アブラムは、ハガルがイシュマエルを産^うんだ時^{とき}、86歳^{さい}だった」(創世記16章9-16節)アブラハムがカナンにやってくる11年前^{ねんまえ}のことでした。イシュマエルは、それぞれが自^{みずか}らの栄^{えい}誉^よの元^{もと}に部族^{ぶぞく}の族長^{ぞくちやう}となる12の王子^{おうじ}の祖^そとなるよう預言^{よげん}されていました。神^{かみ}がサラによってアブラハムに息子^{むすこ}を与^{あた}える新^{あら}たな約^{やく}束^{そく}をされた際^{さい}、アブラハムがイシュマエルに深^{ふか}い情^{じやう}を寄^よせていたのは、神^{かみ}に次^{つぎ}のよう^{ねが}に願^{あき}ったこと^{ごぜん}から明^いらかです。「どうか、イシュマエルが御前^{ごぜん}に生^なき永^{えい}らえますように」(創世記17章18節)

しかし、神はアブラハムに言われました。「イシュマエルについて、私はあなたの願いを聞こう。
必ず、私は彼を祝福し、大いに子供を増やし繁栄させる。12の首長の親となるだろう。私は彼
を大いなる国民とする」

「しかし、私の契約は、来年の今頃、サラがあなたとの間に産むイサクとむすぶ」(創世記17章
20、21節) おそらく、アブラハムの多くの奴隷はイシュマエルを正当な後継者とみなしていたでし
ょう。イサクが生まれた時、イシュマエルは14歳でした。約1年後、イサクの離乳を祝い祝宴が開か
れました。「子供(イサク)は育ち、乳離れした。アブラハムはイサクの乳離れの日に盛大な祝宴を
行った」

「サラは、エジプト人ハガルがアブラハムとの間に産んだ息子がイサクをからかうのを見た」

「そこでサラはアブラハムに言った。女の奴隷とその息子を追い出してください。この女の奴隷
の息子は私の息子イサクと同じ跡継ぎとなるべきではありません」

「このことは、イシュマエルも自分の息子であるゆえにアブラハムをととても苦しめた」

「神はアブラハムに言われた。「その子供と女の奴隷のことで苦しまなくてもよい。サラがあなた
に言うことすべてを聞きなさい。イサクがあなたの子孫を伝える」

「女の奴隷の息子もまた、あなたの子供であるから、私がひとつの国民の父とする」(創世記
21:8-13) イサクという名は「笑う」という意味ですが、それは、サラが年老いて息子を産むというこ
とを聞いた際に笑ったということから来ています。(創世記18章2節)

サラはハガルと十代の息子を追い出しました。砂漠で疲れ果て、死が近づいていると思い、ハガ
ルはイシュマエルから離れたところへ歩いて行き、息子が死ぬのを見るのは忍びないと、
泣きました。(創世記21章14-16節) 神は再び手を差し伸べました。「神は子供の声を聞かれ、
天から神の御使いがハガルに呼びかけて言った。ハガルよ、どうしたのか? 恐れることはない。
神はそこにいる子供の声を聞かれた」

「立って、子供を抱き上げ、あなたの手で抱きしめなさい。私は彼を大いなる国民とする」

「神がハガルの目を開かれたので、彼女は水のある井戸を見つけた。彼女は行き、皮袋に水を
満たし、子供に飲ませた」

「神がその子とともにおられたので、その子は成長し、荒れ野に住み、弓の射手となった」

「彼がパランの荒れ野に住んでいた時、彼の母は彼のためにエジプトの地から妻を迎えた」
(創世記21章17-21節) ハガルは、息子に彼女の民族の出身者と結婚して欲しかったのでしょうか。

キトーの聖書辞典には次のように書かれています。「アラバ(砂漠)の西側、カナンとシナイ山脈の間に位置するパランの荒れ野がイシュマエルの故郷となった…アブラハムの羊飼いである、国境の部族の中には、ゲラルやベエル・シェバ、エン・ミシュパットの井戸(泉)に集い、競う者達がいいたので、追放された人を彼らのテントに受け入れて歓迎したのだろう。イシュマエルのアブラハムとの関係が彼個人への尊敬を増したであろうし、この時代のアラビア砂漠には、エベル(「ヘブライ」という言葉の語源となった)の息子、ヨクタンの子孫がわずかに住んでいるだけだったと思われる。「彼らはメシャからセファルに至る東の高原地帯に住んでいた」(創世記 10章25-30節)ヨクタン人もしくはベネ・カータン、はアラブ歴史学者によって、最初の、最も正当なアラブ民族の祖と考えられている。[ARABIA;Bibliothèque Orientale, s.v.Arabes より] 彼らの名前と集落の痕跡を、ヨクタン人は主に半島の南部あるいは南東部に残したが、イシュマエル人はカナンの国境近くに残した」(同書 2巻 430 ページ)

神は、イシュマエルの子孫は彼の同胞(イサクとヤコブからでたーイスラエルの人々)の東に住むだろうとはっきりと預言されたことを覚えておいてください。イシュマエルが、アブラハムとその家族が暮らした地域の近くにとどまっていたことは、二人の兄弟がアブラハムの埋葬で会っていたという事実から明らかです。「アブラハムは、長寿を全うして息を引き取り、満ち足りて死に、先祖の列に加えられた」

「彼の息子イサクとイシュマエルは、マクペラの洞くつに彼を葬った。その洞くつはマムレの前のヘト人ツォハルの子エフロンの畑の中にあった」

「その畑は、アブラハムがヘトの人々から買い取ったものである。そこにアブラハムは、妻サラと共に葬られた」(創世記25章8-10節)

何世紀も過ぎ、アブラハムの血縁である何万もの人々が中東に暮らしました。彼の老年時、「アブラハムは、再び妻をめとった。その名はケトラといった」アブラハムはケトラとの間に6人の息子をもうけました。

「彼女は、アブラハムとの間にジムラン、ヨクシャン、メダン、ミディアン、イシュバク、シュアを産んだ」

「ヨクシャンにはシェバとデダンが生まれた。デダンの子孫は、アシュル人、レトシム人、レウミム人であった」

「ミディアンの子孫は、エファ、エファル、ハノク、アビダ、エルダアであった。これらは皆、ケトラの子孫であった」(創世記25章1-4節) ご存知のように、その何世紀も後、モーセがアブラハムの息子であるミディアンの息子の一人の子孫、ミディアン人の祭司の娘と結婚します。

イシュマエルは 12 人の息子をもうけましたが、娘 の数はわかっていません。聖書は次のように記述しています。「サラの 女 奴隷であったエジプト人ハガルが、アブラハムとの 間に産んだ息子イシュマエルの系図は次のとおりである」

「イシュマエルの息子たちの名前は、生まれた 順に挙げれば、長男がネバヨト、次はケダル、アドベエル、ミブサム、ミシュマ、ドマ、マサ、ハダド、テマ、エトル、ナフィシュ、ケデマである」

以上がイシュマエルの息子たちで、村落や宿営地にしがたってつけられた名前である。彼らはそれぞれの部族の 12 人の首長であった」(創世記25章2－16節) 12 人の首長を産んだヤコブ同様、それぞれの息子が部族の父となり、イシュマエルもまた 12 の部族の祖でした。ここでの「部族」という言葉は政治的意味ではなく、民族としての意味のみで理解してください。預言では、イシュマエルのそれぞれの息子が特定の国、政治的な国家の主となる、ということではなく、部族の祖となるということの意味しています。

イシュマエル自身は「野生のろばのような人になる」「彼があらゆる人にこぶしを振りかざすので、人々は皆、彼にこぶしを振るう」と預言されました。この言葉は、現在使われているような侮辱としてではなく、砂漠の勇猛で、頑健な、野生的な人を意味しています。常に「同胞の傍ら」に暮らす戦士を表しているのです。前世紀のアラブ諸国のベドウィン族の歴史について、キトーは、「イシュマエル人が国民(ひとつの政治的存在としてではなく、人々という意味)となって 4000 年近く経ったが、人々の気質、風習、習慣、統治、居住、服装など、最初の頃と変わっていない」と述べています。(キトーの聖書辞典 第 2 巻 431 ページ)

何世紀も経ち、ケトラが産んだアブラハムの子供達が、ハガルが産んだアブラハムの子供イシュマエルの子供達と入り混じって、多くの中東の部族が生まれました。そして、彼らは東のインドの近くから地中海に至る広大な地域を占有し、徐々に北アフリカへと拡大して行きました。

「“イシュマエルの人々があらゆる人々にこぶしを振りかざす”のは、彼らの故郷である砂漠にとどまらなかった。激しい過激主義に駆られ、勇敢な開祖ムハンマドに率いられて彼らは征服軍を東方はオクサス河岸、インダス河岸、さらにシリア、エジプト、北アフリカ、スペインへ、西方は大西洋沿岸へと進めた」(同書431 ページ) 聖書はイシュマエルの息子たちは、「村落や宿営地にしがたって」名づけられ、「それぞれの部族の首長」であったとされていることに注意してください。キトーは次のように述べています。「聖書でのこの点についての記述は、まさに、古代の伝統とアラブ人の歴史に一致する。アラブ人の歴史家は、アラブ人を二つの民族に分けている。1. 純粋なアラブ人、ヨクタンの子孫と、2.混合アラブ人、イシュマエルの子孫」(同書 430 ページ)

何世紀もの間、「純粋なアラブ人」とは、「開かれた土地に暮らす人々」、あるいは遊牧民を意味する「ベドウィン」とされていました。この言葉は、「最もよく知られている、アラブ民族の最も重要な

仲間^{な か ま}に与^{あた}えられた名^なである。ベドウィン^{でんしやう}の伝承^{かれ}では、彼らはイシュマエル^{そ せ ん}を祖先^{きた}とする北アラビア^{じん し そ ん}のアラブ人^{きた}の子孫^{さ ば く}である。北アラビア^{かれ}の砂漠^{しゅっしんち}が彼ら^{おも}の出身地^{こ だ い}と思われるが、古代^{せい け}においてさえも、彼らはエジプト^{じん}やシリア^{きた}の低地^{せい ふ く}へ移住^きしていた。7世紀^きのアラブ人^{じん}による北アフリカ^{せい ふ く}征服^きによって彼らは広域^{か れ}に分散^{こう い き}し、現在^{ぶ ん さん}、アラブ的^{げん ざ い}要素^{て き よ う}がナイル^そ溪谷^{け い こ く}（現代^{げん だ い}のエジプト^{じゅうみん}の住民^{じん}はアラブ人^{じん}であり、エジプト人^{みんぞく}という民族^{さ ば く}ではない）やサハラ^{じゅうにん}砂漠^{じん}の住人^{つよ}、ヌビア人^{あらわ}に強く表^{ひ や っ か じ て ん}れ ている。（ブリタニカ百科辞典 第11版 3巻 623 ページ）

サウジアラビア半島^{はんとう}（「サウジ」という名^なは、厳密^{げんみつ}には家系^{かけい}あるいは部族^{ぶぞく}の名前^{なまえ}です）のアラブ人^{じん}の伝承^{でんしやう}によると、彼らは二つの種族^{しゅぞく}に起源^{きげん}があるとされています。「ひとつは、カータン^{だ い め}、あるいはセム^{か け い}から4代目^{し そ ん}の家系^{じゅんすい}のヨクタン^きの子孫^{き か}である純粋^{どうしよ}なアラブ人^{かん}、もうひとつは、イシュマエル^{した}に由来^{か れ}するアラブ化^かされたあるいは帰化^{き か}したアラブ人^{どうしよ}である」（同書 2巻 261 ページ）従^{したが}って彼ら^{か れ}の伝承^{でんしやう}によると、多くのアラブ国家^{お お こ っ か}は、ハム族^{ぞく}とセム族^{しゅぞく}の種族^{こんごう}の混合^{かんが}であると考^{どう}えられます。同百科事典^{ひ や っ か じ て ん}は、次のように記述^{つぎ きじゅつ}しています。「アラビア^{ぞく}は、セム族^{しゅぞく}の地^ちであり、セム人^{じん}の出身地^{しゅっしんち}だと推測^{すいそく}する学者^{がくしや}もいる。この事^{こと}は、まだ証明^{しょうめい}されたとはいえないが、セム研究者^{けんきゅうしや}の言語学^{げんご}的^{がくてき}、考古学^{こうこ}的研究^{がくてきけんきゅう}によってその可能性^{かのうせい}が示^{しめ}されている。アラビア^{ぶ ん さん}からの分散^{そうぞう}は想像^{かた}に難^{ほくとう}くない。北東^{ぶんり}アラビア^{し ぜ ん}から分離^{きようかい}する自然^{いじゅう}の境界^{かんたん}がないので、バビロン^{いじゅう}への移住^{かんたん}は簡単^{かんたん}だった……パレスチナ^{かんけい}との関係^{つね}も常に緊密^{きんみつ}であった……アラビア文学^{ぶんがく}は独自の先史時代^{どくじ}の記録^{せんしじだい}を持^{きろく}っていますが、それは、全^もく伝説^{でんせつ}的で出典^{しゅってん}不明^{ふめい}のものである。（同書263 ページ）

パレスチナの最古^{さいこ}の居住者^{きょじゅうしや}は誰^{だれ}なのでしょう？

多く^{お お}の民族^{みんぞく}が、他者^{た と}、時^{とき}には敵^{てき}によって与^{あた}えられた呼び名^{よ び な}を有^{ゆう}しているということは、歴史^{れきし}が証明^{しょうめい}しています。例えば、ローマ境界^{きやうかい}北部^{ほくぶ}の中央^{ちゅうおう}ヨーロッパ^{あらあら}の荒々^{こうせんてき}しく好戦^{ぶぞく}的な部族^なに名づけられた「チュートン^{ことば}」という言葉^{たん}は、単^{たり}に「槍^{やり}を投^なげる者^{もの}」という意味^{い み}です。ドイツ^{あらわ}を表^{あらわ}す「ドイッチュランド^{ひとびと}」や、オランダ^{い み}の人々^{ことば}を意味^{こ だ い}する「ダッチ^{きげん}」という言葉^{ことば}は古代^{こ だ い}に起源^{きげん}があります。

国籍^{こくせき}を表^{あらわ}す呼び名^{よ び な}が民族^{みんぞく}の本当^{ほんとう}の起源^{きげん}を示^{しめ}していることは滅多^{めつた}にないという事に注意^{こと}しなければなりません。「アメリカ合衆国^{がっしゅうこく}」の市民^{し み ん}を表^{あらわ}す「アメリカン^{じんたんけんか}」は、イタリア人^{じん}探検家^{たんけんか}、「アメリカス・ベスプッチ^{なまえ}」の名前^{なまえ}に由来^{ゆらい}しています。しかし、「アメリカン^{がっしゅうこく}」というアメリカ合衆国^{し み ん}の市民^{かすおお}は、数多^{かずおお}くの異なる民族^{こと}からなりたっています。現代^{みんぞく}の国々^{げん だ い}の多く^{くにぐに}が、最古^{さいこ}の住民^{じゅうみん}やその後の居住者^ごとはかけはなれた呼称^{こしやう}を有^{ゆう}しています。クリストファー・コロンブス^{ま った}は、全^{けんとうちが}く見当^{けんとうちが}違い^{じょうりく}にも、インド^{お も}に上陸^{か れ}したと思^{で あ}い、彼^{げんじゅうみん}が出会^よった原住民^なを「インディアン^{げんざい}」と呼^{のこ}び、その名^{せかいじゅう}が現在^{じれい}も残^{かすおお}っています。世界中^{そんざい}いたるところにこのような事例^{じれい}が数多^{かすおお}く存在^{そんざい}しています。

また、エジプト^{げんざい}に現在^すに住^{みんぞく}んでいる民族^{しゅつ}は、ファラオ^{じだい}や出^{じん}エジプト時代^{こと}のエジプト人^{じん}とは異なるというこも重要な点^{じゅうよう}として覚えておいてください。彼らはアラブ人^{てん}であって、「エジプト人^{おほ}」という民族^{か れ}では

ありません。これと同時に、「ジプシー」の起源を、メキシコや中南米でピラミッドを建設した人々の起源を考えてみてください。

はるか昔から、パレスチナの多くの部族は他者によって、居住する場所や部族の特徴に応じてその名を与えられました。出エジプト時代のパレスチナの部族の呼び名には疑わしいものもいくつかありますが、最も信頼のおける研究では次のように記しています：「一創世記 23章によれば、ヘト人はだいたい前の時期にヘブロンまで広がっていたとされているが、彼らはトメス 3世によって出エジプト以前にパレスチナから追放されていた。[Brugsch、Hist.Egypt. I 325 ページ]ペリシテ人(「パレスチナ」を意味する)―紀元前1200年の記念碑(モニュメント)に描かれ、紀元前15世紀にアシュケロンでダコンを神として崇拝していたペリシテ人はクレタ人の起源だと考えられてきたが、その生き残りの部族は、セム族の呼称を有している。例えば、カナン人は、シャロンやヨルダン溪谷の「低地人(?)」、ペリジ人は、「村人(?)」、ケニ人は、「ヤリの人(?)」、ケナズ人は、「狩をする者(?)」、カドモニ人は、「東方の人」といった呼び名である」上記の多くの呼称は描写的なものかもしれないが、中央パレスチナに暮らしていたと思われるアマレク人[士師記12章15節、一般にはパレスチナ南部の砂漠の部族と言われていたけれど]あるいは、ゲルゲサの近くに居住していたと思われるギルガシ人については、例えその呼び名が描写的であっても、彼らには元々三つのはっきりした祖先があると考えられるので、同じ理屈は当てはまらない。ヘト人、アモリ人については、前者が無毛でつり目でお下げ髪という、明らかにモンゴル系、後者が肌が黒く、顎鬚を生やし、黒髪の鋭い顔立ちのセム族系であることが良く知られている。アンモン人、モアブ人、イシュマエル人の混血、エドム人を含むヘブライ人のグループは、その言語によって先住民族と区別された」(A Dictionary Of the Bible、James Hastings、3巻 646 ページ)

バベルの塔での言語の混乱の直後、セム、ハム、ヤフェトの様々な部族が、ヤフェトは東、セムは西、ハムは中東から南方へと、各地へ広がっていきました。しかし、上記に示されるように、古代から、パレスチナの一部の地域には民族の基礎となる3つの代表的な部族が暮らしていました。ソドムとゴモラの人々はハム族だろうと思われます。ヘト人はおそらくヤフェト族でしょうが、イシュマエル人とヨクタンの子孫はセム族でしょう。

最古の「ペリシテ」人は(彼らの名が土地に深いゆかりを持っていてもアラブ民族ではなく、ハム族なのです！「その地からアッシュールに進み、ニネベ、レホボト、カラ、レセンを建てた。レセンはニネベとカラの間にある非常に大きな町であった」

「ミスライム(エジプト)にはリディア人、アナミム人、レハビム人、ナフトヒム人、上エジプト人、カスルヒム人、カフトル人が生まれた。このカフトル人の中からペリシテ人が出現した」

「カナンは、長男シドンとヘト、そしてエブス人、アモリ人、ギルガシ人、ヒビ人、アルキ人、シニ人、アルワド人、ツエマリ人、ハマト人が生まれた。その後、カナン人の諸氏族が広がった」

「カナン人の領土は、シドンから南下してゲラルを経てガザまでを含み、さらに、ソドム、ゴモラ、アドマ、ツエボイムを経てラシャまでを含んだ」

「これらが、氏族、言語、地域、民族ごとにまとめたハムの子孫である」

ハムは黒人男性で、様々な人種を有する黒人種の祖先であります。このように「文明の発祥地」と一般的に言われる、チグリス・ユーフラテス溪谷（もしくは「川の間の地」という意味の「メソポタミア」）を含むパレスチナと中東地域全体は、元々はノアの息子たち、セム、ハム、ヤフェトから出た3つの代表的部族が広がったものだと考えられます。

中東の地には、当初はハム族も海岸沿いの平野や地中海沿岸に見られたものの、結局は、主にセム族が定住しました。

出エジプト後にイスラエル人によって追い出された民族は、アラブ人ではなく、ハム族であったことを理解しておくのは大切なことです。

イスラエルの民の新たな共同体がシナイ砂漠を通過し、その40年後に、ヨルダン川をパレスチナの方へ渡って行くと、彼らは多くの異なる部族が居住している土地を発見しました。中には非常に大きな部族もあり、その地を偵察するために派遣された者達は、彼らが見た「巨人」に恐れを抱きました。カレブへの彼らの報告によって暴動が起こりそうになりました。海岸沿いの平野やパレスチナの山間部の民族は「アナクの子」と呼ばれる、南部地方に住むアマレク人、ヘト人、エブス人、アモリ人、カナン人でした。

アモリ人は山地に、カナン人は地中海やヨルダン川西岸沿いに住んでいた（民数記 13章）

カナンはハムの息子であって、セムの息子ではないことを覚えておいてください。「パレスチナ」を「カナンの地」としているものが多くありますが、これはアラブ人の祖先を意味しているのではありません。

暴動寸前の事態と、人々の神への信仰のなさから、二十歳以上の者は誰一人その土地に入ることがないだろうと予言された（民数記14章29－32節）二十歳以下の若者だけがヨルダン川を渡ることが出来ました。約束の地へ入ることを試された後にそれを拒絶され、イスラエル人は、ヤコブの兄、エサウの子孫であるエドム人に彼らの土地を通過させてもらうよう頼みました。聖書ではこう書かれています。

「モーセはカデシュからエドム王に使者を使わした。「あなたの兄弟であるイスラエルはこう申します。あなたは、わたしたちの上にふりかかった、かん難をすべてご存知でしょう」

「わたしたちの先祖^{せんぞ}はエジプトに下^{くだ}り、長年^{ながねん}エジプトに住^すんでいました。エジプト人^{じん}がわたしたちの先祖^{せんぞ}とわたしたちを苦しめ^{くる}ました」

「主^{しゅ}に助け^{たす}をもとめて叫^{さけ}びますと、主^{しゅ}はわたしたちの声^{こえ}を聞^きいて御使^{みつか}いを遣^{つか}わし、エジプトから導^{みちび}きだして^{いま}くださいました。今^{いま}、私^{わたし}たちはあなた^{こつきよう}の国境^{ちか}に近い^{まち}カデシュの町^{まち}にあります」

「どうか、あなた^{りようど}の領土^{つうか}を通^{はたけ}過^{ばたけ}させてください。畑^{なか} やぶとう畑^{かよ}の中^いを通^どったり井戸^{みず}の水^のを飲^のんだりし^しません。あなた^{りようど}の領土^{つうか}を通^{みぎ}過^{ひだり}するまで、右^まにも左^{おう}にも曲^{みち}がること^{とお}なく、王^{おう}の道^{みち}を通^{とお}っていき^います」

「エドム人^{じん}は彼^{かれ}に答^{こた}えた。私^{わたし}の領内^{りょうない}を通^{とお}ってはな^{けん}らない。もし通^{まへ}れば、剣^{むか}をと^うってお前^うを迎^{むか}え撃^うつ」

「イスラエル^{ひとびと}の人々^{ひと}は言^{ひろ}った。わたしたち^{みち}は広^{とお}い道^{みち}を通^{さい}りますし、その際^{かちく}、わたし^{かちく}や家畜^{かちく}があなた^{みず}の水^のを飲^のむことがあ^{だいか}れば、その代価^{しはら}は支^と払^ほいます。徒歩^{つうか}で通^と過^とするだけ^とです。取^とるに足^たらぬこと^とです」

「エドム人^{じん}は、通^{つうか}過^いしてはな^{きようりよく}らない、と^{ぐんぜい}言^{ひき}い、強^{むか}力^うな軍勢^うを率^ういて迎^{むか}え撃^うとうと^うした」

「エドム人^{じん}はこのよう^{じぶん}に、自^{りようど}分の領土^{つうか}をイスラエル^{ゆる}が通^う過^{かい}することを許^うさず、イスラエル^うは迂回^うしな^{かい}ければなら^うなかつた」(民数記20章14-21節)

アーオン^{しご}の死^{じん}後^{おう}、カナン人^{じん}のアラド^{たたか}という王^{じん}がイスラエル人^{じん}と戦^{たたか}い、捕虜^{ほりよ}をと^りました。

「南^{みなみ}に住^すむカナン人^{じん}の王^{おう}アラド^{おう}は、イスラエル^くが来^きると聞^きき、イスラエル^{たたか}と戦^{ほりよ}い、捕虜^ひを引^いいて行^いった」

「イスラエル^{しゅ}は「主^{ちか}」に誓^たいを立^たてて、「この民^{たみ}をわたし^ての手に渡^{わた}してくださ^るならば、必^{かなら}ず彼^{かれ}らの町^{まち}を破^は壊^{かい}させ^ます」と言^いった」

「主^{しゅ}はイスラエル^{ことば}の言^き葉^いを聞^きき入^いれ、カナン人^{じん}を渡^{わた}された。イスラエル^{かれ}は彼^{かれ}らとそ^{まち}の町^{まち}々^{まち}を破^は壊^{かい}させ、そ^ちの地^ちをホルマ^よと呼^{みんすうき}んだ」(民数記21章1-3節)

「カナン人^{じん}」という言^{ことば}葉^ばはヨルダン^{けいこく}溪谷^ちから地中^ち海^すにかけ^ちてのパレスチナ^すの地^{おお}に住^{おお}む多^{みんぞく}くの民^{みんぞく}族^{ぞく}を指^さしていま^しました。ゼパニヤ^{よげん}は預^{うみべ}言^すしました。「海^{じん}辺^{じん}に住^{じん}むもの、ケレテ人^{じん}よ！わざわいあ^れれ！ペリシテ人^{じん}の地^ち、カナン^{しゅ}よ、主^{ことば}の言^{ことば}葉^ばはあ^{たいじ}なたがた^{わたし}に對^い峙^{もの}します。私^のは生^こき物^こが残^のらぬま^で、あ^{なた}な^を滅^{ほろ}ぼし^つくそ^う」(ゼパニヤ書 2章5節)「カナン人^{じん}」という言^{ことば}葉^ばは、ハム^{しん}の息^{むすこ}子^しであるカナン^しの子孫^しというよ^りも、むし^ろ何^{なん}世^{せい}紀^きにもわ^たたつてパレスチナ^ちの地^{きよじゆう}に住^{おお}居^{みんぞく}した多^{あらわ}くの民^{みんぞく}族^{ぞく}を表^{あらわ}してき^たた^いうこと^{から}、論^{ろん}争^{そう}の的^{まと}とな^りてき^ました。ブリタニカ^{ひやっか}百^じ科^{てん}辞^{だい}典^{ばん}(第11版)では、カナン^{むすこ}(ハム^との息^ち子^さではなく、土^と地^ちを指^さす)は、特^{とく}にアラビ^ごア語^よの呼^なび名^なとされ^ていま^す。

紀元前4000年頃から始まった、アラビアを出たセム人の移民の波のバビロニア、あるいはシリアやパレスチナへの流入は、もはや単なる仮説ではありません。紀元前2800年から2600年にかけてのアラビアからの第二の移動の波は同じ進行をたどり、バビロニアのみならず、シリア、パレスチナからおそらくエジプト(ヒクソス)にまで及んだ。(同書5巻 140-141 ページ)

歴史書は、紀元前3000年に始まる「青銅器時代」初期からセム人(ノアの息子セムからきており、アラブ人とイスラエル人民族全ての祖)の波が継続的にパレスチナへ押し寄せたと記しています。

紀元前1479年、エジプトのトトメス3世がその地域を征服しました。エジプト人の支配は、新たにこの地に到着した移民、すなわちメソポタミアからの「ハビル人」(ヘブライ人でユダヤ人ではないがエベルの初期の子孫)、レバノンからのアモリ人、(現代のトルコである)アナトリアからのヘテ人によって脅かされました。紀元前1000年から1200年になってようやく、「海の民」という意味のペリシテ人が、エーゲ海沿岸や今日のパレスチナの海岸沿いの平野に定住しました。

紀元前1225年頃、イスラエル人はエジプトでの数百年の奴隷時代の後にヨルダン川を渡り、その地に定住しました。

アメリカナ百科事典は、「紀元前1150年以降、(パレスチナでの)エジプト支配は弱まった。ペリシテ人が触媒的な役割を果たし、イスラエル最初の王、サウルと彼の偉大な2人の後継者、ダビデとソロモンのもとでイスラエルの12の部族の統一が始まった。紀元前973年の死の際には、ダビデはすでにエルサレムを征服し、そこを拠点にペリシテ人を退けた」としています。(同書 21巻 199 ページ)

かつて、エルサレムがアラブ諸国の政治的首都であったことはありません。イスラエルがエジプト後にパレスチナの地を占領した際には、まだ「イスラム」という宗教は存在していなかったことを覚えておいてください。パレスチナ初期の民族は、全くの未開人だったのです。多くが幼児生贄を行っていました。彼らは多神教で、「パール」(ニムロデもしくはイシス)やニムロデの母であり妻であるセミラミスもしくは「イシュタル」(イースターと発音されました)といったバビロンの神秘的な宗教の創始者を崇拝していました。

イスラムもしくはイスラム教、「モハメット」の創造は、キリスト教が生まれてから6世紀以上の後、325年のニカイア公会議後3世紀以上経つまで世界に登場しませんでした。中東の信仰は、まず洪水後の開祖からはじまり、アブラハム、イサク、ヤコブ、そして最後にエジプトの奴隷から脱出した、約束の地へ至った頃のイスラエル人からなっています。イスラム教の信仰とモーセの話には類似点が目立っており、イスラム教徒は宗教的のみならず民族的にもアブラハムとの明確な関係を主張しています。

ムハンマドと「イスラム」

「イスラム」と呼ばれる信仰は、その創始者「マホメット」もしくは「ムハンマド」(歴史上、様々な綴りをされます)によってそのように称されましたが、アラブ民族の間では事実上普遍的な信仰です。その起源は、632年6月7日あるいはアラブ暦のイスラム紀元11年に死亡したとされるムハンマドの生涯や教えにあります。イスラムという言葉は「服従」や「帰依」を意味します。アブラハムがイサクを生贄にしようとした状況での神への絶対的な服従、または、イサクが父の意思と目的に対して素直に従ったということが起源とされています。マホメットは彼の信仰をこの概念に沿って創ったと考えられ、コーランでも何度も言及されています。

マホメットは「預言者」あるいは「使徒」であると主張しました。時に応じてマホメットは両方の単語を使いましたが、後者はユダヤ人に使いました。マホメットは神の唯一の代弁者であるとして、後に彼の土地において「神に任命された独裁者」となりました。彼に背くことは神の報復を招くとして反抗を抑えました。自らを毛布でくるみ、瞑想状態に入り、大量の発汗後、神のお告げや祈りの言葉を発し、最初の啓示を受けたとされています。マホメットは、最初に近親者のみに啓示を伝えるために「導かれ」と言っています。

後に、マホメットの信奉者をもっと教えを広めるように彼に促し、それが結局はメッカからの追放や、彼の「ヒジュラ」あるいは有名なメディナの闘いにつながりました。この出来事は、イスラムの日付でもキリスト教徒の「紀元前や紀元」(「キリスト以前」、「キリスト紀元」、「主の年」)でも同じです。ブリタニカ百科辞典第11版によると、「最初にマホメットが一般の人達に教えを説き始めた際の拒否反応は、コーランにもはっきりと書かれているが、それは、度々、マホメットの影響力を強めようとする熱心な信徒達による強圧的なものがあつたからではないかと推察されます。土地の賢明な支配者は、マホメットの教えは、彼が独裁者あるいは専制君主になろうとしているものと考えた。彼ら自身、このような考えは馬鹿げていると思いますが、そのうち何人かは、マホメットが非難した神または女神の崇高な信者でした。そこには当然、討論に続き策略や力による争いが起こりました。その後マホメットの関心は、国外での改宗へと向き、ヤスリブへの招きを受けてその地で支配者となった」(同書17巻403ページ) ヤスリブは後のメディナとして知られています。

ヤスリブには、アウスとハズラジュという当時対立していた二つの主要部族がいました。ヤスリブ、もしくはメディナには、大きなユダヤ人共同体がありました。二つの部族間の一連の闘争で、アウスはハズラジュに負けていました。ユダヤ人はこの闘争には関わっていませんでしたが、結局はバアースの戦いでアウス族側で戦わざるをえませんでした。マホメットは、ユダヤ人が(現在イスラム教徒の間で一般的な名前)ラーマンとする、「神から授かった称号」を使っていました。戦いに勝利した際、ユダヤ人は神の介入があつたからだと考えたのは疑いないでしょう。

マホメットがメディナの人々に教えを説くと、アウスとの次の戦いでイスラエルの神の助けを求め、ハズラジュ族の中に最初の改宗者となる者がでました。ブリタニカ百科辞典第11版では次の

ように記載しています。「対立を鎮め秩序を回復するために預言者をメッカに支配者として招くという計画が、古代ギリシャが申し出た類似の手段に取って代わった。新たな改宗者達はこの計画のために、ヤスリブ(メディナ)で秘密裏に宣伝活動を行うよう命じられた。次の祝祭日には、対抗する派閥の中にもイスラムを信奉する者ができた。マホメットの信頼できる信徒、ムサブとウマルはマホメットに容姿が似ていたので、その計画を支援するためにヤスリブへ遣わされた。この時初めて、改宗者が守るべき一連の約束、すなわち、密通、窃盗、幼児殺し、詐称をしてはならず、マホメットに完全かつ誠実に服従する、というイスラムの契約がなされた。アウス族の二人の首長ウサド(Usaid b.Huraith) とサード(Sa'd b.Mu' adh) によってヤスリブの大規模な改宗が決定された。改宗はさらに広がり、その地での聖像破壊が広まった。次のメッカの祝祭日には、70人のヤスリブの代表がマホメットを正式に招き、マホメットはそれを一定の条件下で受け入れた」(同書17巻403-404 ページ)

個性の強さと神の権威を主張することで、マホメットはアウス族とハジュラジュ族だけではなく、メッカの有力者にも強敵として大きな影響を与えました。ブリタニカ百科辞典では、「ヤスリブの人々との取引は極秘裏に行われたが、マホメットの新たな信徒との契約は、メッカの有力者にある程度漏れ、北回りの隊商の交易路にマホメットという執念深い敵の存在を許す危険性を彼らに知らせました。神聖な都市での流血を禁じる規則がついに一時停止となった。(マホメット自身の家系を除く)あらゆる部族はそれぞれの罪を負うという事前警告が地域全体に広がった。反対派がマホメットを殺すという罪を犯そうとマホメットの家に到着した時、すでに遅く、マホメットはアリーを身代わりに寝床に横たえて脱出していた」と記載しています。(同書17巻404 ページ)

マホメットの隊商への攻撃については、マホメット軍との戦いで最初に殺された人物の名前をはじめ、数多くの記述があります。その人物はアムル・アル・ハドラミ(Amr b.Al-Hadrami)という隊商の一員で、神聖なラジャブの月の初めにマホメットの信徒に攻撃されました。マホメットは彼の拘束と解放という力を利用することを決め、隊商が安全だと思い襲撃を予想していない時に攻撃を命じました。数カ月後、マホメットは、前年に彼が難を逃れたシリアから戻る隊商に攻撃をしかけました。「ヘルパー:救援隊」と呼ぶ多くの信徒を含む300名の攻撃隊を組織しました。隊商のリーダーは攻撃をある程度は察知し、強行軍で帰国を急いでいました。

後に、624年、3月17日にマホメットの信徒とメッカ側との間で大規模な戦いが行われ、マホメットは、神の介入のおかげとして決定的な勝利をおさめました。マホメットは、悪魔がメッカ側を混乱させた一方、神が彼の側に天使の連隊を遣わされたと主張しました。

ブリタニカ百科事典(第11版)は記述しています。「伝承されている信頼のおける物語では、この結果について、イスラム教徒の規律の優秀さとメッカ側の規律の欠如を原因としている。マホメット自身は最初に血を見た際に気絶し、敗戦に備えて足の早いラクダが繋がれた、彼のために建てられた小屋に戦いの間中とどまっていたと言われている。しかし、こうした記述は彼がホバ

ブ・アル・モンディール(Hobab b.al-Mondir)に戦略を任せつつも、自分が戦法に責任を負っていたことを示している。マホメットのメッカの旧敵や友人達の幾人かはこの戦いで死亡した。その中には彼の叔父アブ・ジャール(Abu Jahl)もいた。敵対する叔父でコーランで呪われているアブ・ラーブ(Abu Lahab)はこの戦いの場にはいなかったが、直後に死亡した」(同書17巻405 ページ)

イスラム教の伝承において「解放の日」と言われる日は重要です。マホメットへの超自然的な助けという話は、敗戦したメッカ側の感情を和らげました。マホメットは人望を得てメディナの敵を攻撃しました。同百科辞典は、「勝利の結果、一連の暗殺が行われ、それによって彼の行動への批判がなくなった」と記述しています。(同書17巻405 ページ)

「アサッシン:暗殺者」とは元々秘密裏に殺人を行う者で、有名なケシの葉の汁から作られるアヘン「ハッシシ」に由来しています。ハサン・サバ(Hassan(ibn)Sabah)によって創始されたイスマーイル派として知られるシーア派の一派である「ハッシシ」が「アサッシン」となったものです。

マホメットは、結局はメッカを制圧し、数年後にはアラビア半島一帯を制圧しました。彼の勢力は拡大し続けました。ペルシアの征服は、塹壕を掘ったことで知られるヒジュラ暦紀元5年には、預言者がすでに検討していたといわれていますが、実際にはヒジュラ暦紀元7年のメッカ制圧の直前でした。預言者は知っている限りの君主や有力者に対して、イスラムを信奉するならば安全を保障するという手紙を送ることを思いついたのでした。こうして、マホメットは、最終的な世界征服を心に描きました。ブリタニカでは、「預言者は、彼の全ての啓示はユダヤ教やキリスト教の経典を認めるものと述べており、彼がユダヤ教やキリスト教をどの程度知っていたかは相当あいまいで不正確なものの、この主張は概して妥当なものである。さらに、彼は旧約聖書を出来る限り忠実に再生し、彼の先祖と思われるイシュマエルに関して名声を高めようと試みたが、北アラブの民族の祖が女奴隷の息子だったという聖書の話に疑問を呈することはなく、イスラエル人が選ばれた民族だということも認めていた」としています。(同書407 ページ)

マホメットーイスラムの宗教

アラビア語で神の名は、ヘブライ語を語源とする「エロヒム」に似た「アラー」です。聖書で神を表す多くの名前、題目については、聖書のオックスフォード・キング・ジェームズ版の「神の名とタイトル」セクションの「神」の項目、あるいは、ブリンガー著の**必携聖書**(Companion bible)の注釈や別表を参照してください。

イスラム教とユダヤ教には多くの類似点がありますが、大きな相違点もあります。一神教としてイスラム教では、イスラム教義で最も一般的な記述のひとつである「アラー以外に神はなし」という第一信仰箇条を主張しています。イスラム教徒やイスラム教の信奉者は、あらゆるものが存在する以前に存在し、全知全能である神はひとつと信じています。彼らは、彼らの神があらゆるものの

創造主であり、コーランによると、彼は「お産みなさらないし、お産まれになられたのではない：かれに比べうる何ものもない」とされています。

二番目に重要な信仰信条は、マホメットもしくはムハンマド、「メフメット」(トルコ語)がノア、アブラハム、モーセ、イエス・キリストと同様に神の使徒だと信じられていることです。イスラム教徒のアラブ人はイエス・キリストが神の「預言者」だったと考 えてはいますが、イエス・キリストを救世主だとは認めません。むしろ、マホメットがあらゆる預言者の中で最後のそして最も偉大な預言者であり、エルサレムの岩のドームがある場所から天に昇ったと信じています。

キリスト教徒、少なくとも一部のキリスト教徒が、聖書が神の言葉を示していると信じているのと同様に、イスラム教徒のアラブ人は、コーランは大天使ガブリエルによって一語一語書き取られた神の言葉だと信じています。また、コーランは「原語」つまりアラビア語のみで学ばれ、複写されるべきであり、コーランの原本は神とその天使によって守られている第7天国にあるとされています。

洗浄式のレビの儀式では、イスラム教徒は洗浄と沐浴の儀式を受けるまで何人もコーランに触ってはならないとしています。聖書同様、イスラム教徒は人間より高位の霊的存在として天使を信じしており、聖書での呼び名に似た名称がつけられています。

飢えた者が食べ物と水を求めるように、砂漠の住民は「楽園」や「天国」とは日陰や水、安らぎ、休養、楽しみ、官能的な満足の場として思い描くでしょう。コーランでは「彼は、彼らを寝床の上に横に休ませ、楽園と絹の衣で彼らの耐えた全ての苦労をお報いになられた。」「彼らは酷暑の太陽も、凍える寒さも感じることは無いだろう。木陰はかれらの上を覆い、(果実の)房は慎ましく垂れ下がる。彼らには、銀の器と銀で出来たワイン瓶の様な 杯 が、彼らが好きなだけ振る舞われよう。彼らはそこで、サルサビルという泉 で採られた生姜を混ぜた飲み物を与えられることでしょう。あなたの眼には散りばめられた真珠の様に映る、永遠に若き少年たちが彼らの間を往来するでしょう。あなたは視線を向けると至福の壮大な王国を認めるであろう。彼らは美しい緑色の絹と錦の外衣を纏い、銀の腕輪で飾られ、主はかれらに純 良な飲み物を飲ませられる」としています。(コーラン 76章12-12節)

イスラム教の天国で飲まれる「純 良な飲み物」についても、現世の金属である金や銀、そして生物学的な「果物」がどうして「天国」にあるのかも言及されていません。多くの宗教では、現世を脱して「より高位」な存在への移行を想像し、例えばこのような完全に精神的な(霊的)なものとしての移行を認めたとしても、遊びや美しい服、豪華な家や食事といった物質的、官能的な報いを信じる傾向にあります。

信仰によると、楽園に入れるのは、生存するために食料や飲料に頼る物質的な代謝生物ではなく「魂」や「靈魂」だけであるのに、五感の楽しみを想像することは、滑稽で非論理的に思えます。

イスラム教の信仰でも、最後の審判の日が想定されており、何百万ものキリスト教徒同様に、「靈魂」の不滅や呪われた者が永遠に苦しめられる地獄の炎が信じられています。

イスラム教の指導者は、「地獄」は7つの区分から成り、邪悪なる者は邪悪の程度に応じて様々な責め苦を与えられると説明しました。

宇宙や彗星の後を追う「母船」からきた異星人を信じる「ニューエイジ」を含む他の宗教同様、イスラム教のあらゆる宗派は、「魂の不滅」という概念に基づいて創始されています。

キリスト信仰と違い、イスラム教は人生の追求や実践から原則的に切り離された単なる「信仰」ではありません。何百万ものキリスト教徒は共に働き、遊び、社会との接触を楽しみつつも異なる教会へ通い、異なる教えを信仰しています。しかし、イスラム教徒は、外への実践を求めています。

教区民に祈るよう強く勧める説教を何度も行ったとしても、自分の教区民が祈りを捧げているかどうかは、キリスト教教会の牧師にはわかりません。しかし、イスラム教では神への言葉での告白を義務付け、モハンマド(あるいはムハンマド)のみが預言者であるという言葉での承認を求めています。

イスラム教には5つの信仰の「義務」があります。第一は上記に記しました。第二は戒律で定められた、1日5回の礼拝です。私は中東を何度も訪れましたが、アンマンからカイロ、そしてエルサレムからイスタンブールへと至る町々で、イスラム寺院の尖塔のスピーカーから「お祈りを呼びかける」録音された声が響き渡っている、という感動的な記憶があります。

世界中のイスラム教のモスクでは、何百万ものアラブ人が整然と列になり、床の絨毯に額を何度も押し付けて祈りの言葉を聞いています。定められた祈りの準備には、清浄と沐浴が含まれます。定められた沐浴(水が無い場合は砂や埃さえ使われます)に続いて、イスラム教徒はメッカの方向を向いて立ち、それから様々なやり方で暗唱し、床にひざまずき、何度も身体と頭を床に向かって折曲げます。これは、夜明け、正午、昼下がりに、日没時、そして夜に行われます。

サウジアラビアのような石油が豊かな中東の裕福なアラブ人の多くは、ボーイング 747 のような大きな飛行機や豪華な自家用飛行機を所有しています。サウジアラビアの王様のために準備されていたこのような飛行機の内装のスケッチとデザインを私は見たことがあります。飛行機がどの方向に飛ぼうと、メッカの方向を気泡の中の針が指し示すようなコンパスが天井に備え付けられた、豪華で大きな部屋が特徴になっていました。このように、時間になると、搭乗者

が大きな部屋に集い、イスラムの祈りを録音したテープを流し、メッカに向かって祈りを捧げることができるのです。

イスラム教の第三の義務は、施しです。施しは、当初は、モスクを建設し貧しい者を助けるという目的に使われるように、決められた役人が集めていました。信仰が世界に広がるにつれ、この施しの行為は個人的なものになりました。

断食は第四の義務です。「ラマダン」とはコーランで示されている月のようです。イスラム教徒が当初使用していたのは、太陰暦だったため、「ラマダン」は、太陽暦で様々な月に変わり、夏の暑い時期になることもあります。しかし、「断食」は、夜明けから日没までの期間のみ我慢することになります。日没後から次の夜明けまでは、お腹一杯食べてもかまいません。

第五の義務は、少なくとも一生に一度はアラビアの神聖な場所、できればメッカへ巡礼することです。巡礼はアラビア語で「ハッジ」と言います。イスラム教徒がこのような巡礼を行うと、その人は自分の名前の前に肩書きのような名前をつける資格を得られます。「出エジプト:Exodus」で知られるベストセラー作家、レオン・ユーリス著の「巡礼:The Haj」は、イスラエル国家の建国や1967年の6日間戦争以前に、何十年もパレスチナで一緒に暮らしてきたアラブ人とイスラエル人の考え方について興味深い洞察を得られる素晴らしい本です。

最後に、これは少なくともひとつのイスラム教の宗派が第六の義務としているものですが、「ジハード」もしくは「聖戦」を遂行する義務です。この考え方は、イスラム教を世界の一つの区域、つまり平和が支配する区域を占めるものと考えます。そして、もう一方の区域は非イスラム教徒が占める区域であり、非イスラム教徒をイスラム教という旗印の下に連れて来るのが全てのイスラム教徒の義務だとするものです。コーランには次のような一節があります。「あなたがたに戦いを挑む者があれば、アッラーの道のために戦え。だが侵略的であってはならない。アッラーは侵略者を愛さない。かれらに会えば、どこでもこれを殺しなさい。あなたがたを追放したところからかれらを追放しなさい。迫害は殺害より、さらに悪い。」

これは現在のパレスチナの状況からして特筆すべき点です。悪名高い、第二次世界大戦中、太平洋戦争末期の日本の「神風(聖なる風)」自爆攻撃のように、狂信的なイスラム教徒は、国外の混み合ったバスやカフェ、ショッピングセンターで自らを粉々に吹き飛ばすような自爆攻撃犯となります。彼らは、自分たちの命を「異教徒」やイスラム教を信じない者を殺すことで失うならば、イスラム教の天国へ即座に行くことが約束されていると信じています。

「汝の敵を愛せ」というイエス・キリストの教えを信じるごく一般的なキリスト教徒は、このような憎しみや狂信的な信仰の根底を理解しがたく思っています。一般のキリスト教徒は、キリストや聖書の教えに従うように努力する期間として神から与えられた、肉体のある現世を尊いものとし

ています。残念ながら、イスラエルでの長年にわたる事例が示すように、決意を秘めた自爆犯に
対する防御はほとんど不可能です。マホメットの教えは最終的に中東やアフリカ、パキスタン、マ
レーシア、フィリピン、インドネシアに広まりました。地球上の7人に1人がイスラム教の信徒です。
マホメットは歴史の記録には出てこない都市、メッカに住んでいました。その地のイスラム教以前
の宗教は、ほぼ間違いなく多神教で、「キューブ」(アラビア語で「カーバ」という「黒い石」の聖地
が特色でした。イスラムの4世紀に、黒い石はカルマツ派(Carmathians)に盗まれましたが、後に
戻りました(ただし、戻ったのが同じ石かどうかは証明されていません)

あらゆる宗教に、独自の主張を唱える分派の指導者志望の者がいるように、イスラム教にも
中傷者や脱退者がいます。そうした分派のひとつがカルマツ派(Carmathians、もしくは
Qarmathians)です。これは自身が「イスマーイール派」もしくは「イスラム」と呼ばれる宗派に転向
したハムダーン・カルマツからその名をとった分派です。カルマツはイラクに住んでいました。彼
の師は、ホサイン・アーワジ(Hosain ul-Ahwazi)でした。アーワジは、ペルシアのシーア派、アブダ
ラー・マイムン(Abdallah ibn Maimun)の息子で、信者を魅了するために宗派内に秘密結社的な
様々な階級を導入しました。多くの宗派や異教のように、指導者への個人的な絶対服従が必要
条件のひとつとされていました。

また、多くの異教同様、一旦信者となると、7つある階級を制覇するまで、ある段階から次の段階
へと進まなければなりません。この階級は後に9つまで増やされました。第1段階で信者は、若干
のお金を支払い完全服従の宣誓をします。そして、コーランには、特別な師「イマム」によってのみ
説明可能な「神秘」があることを示されます。次々と段階を進んで行くと、主流のイスラム教の師
達は教義上間違っており、絶対正しいのはイマムのみであると示されます。彼らは公然あるいは
秘かに、「イマムが常に存在して来た」ことを学びます。そして、イマムは間違いを犯すことがなく、
6代目のイマムの長男イスマーイールがワインを飲んだので、ワインを飲む事は間違っていないと
するのです。アルコール飲料を飲む事はイスラム原理主義者は厳しく非難しています。

信者が秘密の教義の第5段階をパスする頃には、彼らはイスラム教を信じることを辞めてしま
います。彼らの教義はシリア、アラビア、イラン、インド、ザンジバルで20世紀初頭まで残っていたと
言われています。

アッバース、セルジュークトルコとオスマン

ムハンマドもしくはマホメットの死後間もなく、中東全体を支配する様々な王朝が現れました。オ
スマン帝国の最盛期には、イスラム教はオーストリアのウィーンからインドまで支配力を及ぼして
いました。

マホメットの最年長の叔父「アッバース」は、566年から652年まで生存していました。彼の家系は
預言者マホメットの正当な後継者であるとして、同じく後継者を主張するウマイヤの子孫と争って

いました。「カリフ」という言葉は「後継者」という意味です。マホメットの死後間もなく、正当な後継者が誰であるかという様々な議論が起りました。カリフの地位に関することやイスラム教の漸進的な発展については多くの歴史から学ぶことができます。簡単に言えば、メディナの市民は、マホメットの死後の出来事については自分たちが責任を負うと考え、自らカリフあるいは後継者を指名したいと望みました。カリフという言葉は、最終的には「後継者」というより「指導者」という意味になりました。

東方では、「カリフ」であったイスラム教の指導者は3つの主な派に分けられました。彼らはマホメット、ウマイヤ・カリフ、アッバース・カリフの直属の後継者であった最初の四人のカリフから成っていました。ブリタニカ百科事典(第11版)によると、「ウマイヤ朝の第二期を通して、ウマイヤ家の代表は、アッバース家の正統性や人格、運営を非難したり、王朝のアラブ人と非アラブ人間の嫉妬による内輪もめを狡猾に操作したりすることで、現君主の名声を傷つける手法をとるなど、アッバース家にとって最も危険な敵だった」としています。(同書1巻10ページ)

現在のヨーロッパやアジアのトルコまで軍をすすめたセルジュークトルコは、バグダッドのカリフの子孫の権力を受け継ぎました。

11世紀からごく最近(第一次世界大戦終了時)まで、中東とパレスチナはトルコが支配していました。セルジュークは、3世紀以上に渡って幾つもの王朝を樹立したトルコ人の家系です。彼らの支配はトルコ帝国の歴史の前半を形成しています。

彼らは、おそらくは、トルキスタン(トルコ人に見える者という意味)の砂漠からやって来たエドム人でしょう。彼らが政権を取ることによって正統なイスラム政権が復興されましたが、イスラム教自体の存続に脅威を与えた破壊的な教義の過激・シーア派の影響で崩壊に至りました。セルジュークの最初の君主は、セルジュークを祖父とするトゥグリル・ベグ(Toghurl Beg)、チャグリー・ベグ(Chakir Beg)、イブライム・ニヤル(Ibraim Niyal)でした。

セルジュークの王朝については数多くの文献があります。十字軍による幾度かの短期間の例外を除いて、セルジュークとその後のオスマン帝国がパレスチナ、そしてエルサレムを何世紀も支配しました。

伝説によると、カラ・カーン(Kara Kahn)の息子、「オグズ(Oghuz)」が、「オスマン帝国の父」とされています。オスマン帝国は約700年にわたって中東を支配しました。

この長い支配の間に、アラブ人やトルコ人指導者側では、パレスチナに「独立パレスチナ国家」を樹立することや、エルサレムを政治的首都にするという提案が一度ならずなされていたことに注意しなければなりません。

オスマン帝国の何世紀もの間、イスラム教の刃はウィーンの入口まで及び、バルカン半島の大半を征服し、インドからオーストリアにかけてまで勢力を伸ばしたこともありました。陰謀、戦い、協定、謀反、殺戮といった、この広大な歴史のほんの一部を詳記するだけでも分厚い本が必要になるでしょう。パレスチナとエルサレムを巡る現在の紛争の根源となる膨大で詳細な歴史の要点として、(地理的に当然必要であり、過去の戦争と紛争から必要とされた)ロシア皇帝のトルコへの関心について、ブリタニカ百科辞典(第11版)からの抜粋を見てみましょう。「メフメト(ムハンマド)・アリー」の件では、列強との連携によって彼「ニコライ皇帝」は、コンスタンティノープルへの独占的な影響力を放棄し、ヨーロッパにおけるオスマン帝国の支配を終焉させるという考えを再び抱くようになった。この考えは、1829年に彼の助言者達の一致した意見を受けてあきらめざるを得なかったものだった。1844年、彼は英国閣僚に、英国がエジプトとクレタ島を得て、コンスタンティノープルは自由都市とし、バルカン諸国はロシアの保護の下に自治を行うという分割計画を提案するためにイングランドを訪問した。この提案は、予想通り、ロシア側がこの計画に関する疑惑を抱き、体よく拒否された。そして、1850年初頭まで東方問題は休止状態となったが、些細ではあるが、将来の問題の種となるできごとによって新たな展開を迎えた。それは、パレスチナの聖地に関するカトリックと(ギリシャ)正教の僧の間での論争だった」(同書27巻459ページ、強調点を追加しています)

この論争の地政学的影響は非常に大きなものでした。私たちが知っているように、第一次世界大戦を含むその後の50年間の幾多の戦争に勝利を収めて、3大勢力として浮上したロシア、フランス、英国による、オーストリアからパキスタンにいたる広大なこの地域全体の分割という結果を招いたのです。

ムハンマドあるいはマホメットの生誕のはるか以前、キリスト教徒の信仰では、「聖地」をエルサレム付近だと主張していました。修道院が創立され、大聖堂が建設されました。後のカトリック教会のギリシャ正教と(ローマ)カトリック教会への分裂によって、2つの教会の間で必然的に競争が起こりました。キリスト教の信仰は、パレスチナでのイスラム教の信仰よりも800年近くも先立っていることを思い出してください。現在、闘争の根源は、イスラム教とユダヤ教間の紛争ですが、キリスト教世界では、サウジアラビアや湾岸諸国が重要なエネルギー源となっていることから、この紛争に深い懸念を持っています。初期段階では、この紛争はギリシャ正教と(ローマ)カトリック教会、そして、キリスト教とユダヤ教の間の紛争でした。イスラム教は後からこの紛争に登場したのです。

1850年、エルサレムのギリシャ正教とカトリック教会の僧の間の闘争の結果、ナポレオン三世は、コンスタンティノープルのオスマン政府に対してエルサレムのカトリック聖職者の権利を制限する正式な要求を申し入れました。

ブリタニカ百科事典では、「この問題は、東方に重大な影響を及ぼすフランスとロシアの争い
同様に、英国を必然的に巻き込むような争いであることは明らかだった」としています。(同書27
巻460 ページ)これは重要なことです。パレスチナへの十字軍の遠征は宗教的な紛争にあおられ
ていたものの、英国は主に経済に関心を持っていました。英国政府が、コンスタンティノープルに
対して、オスマントルコは新教徒とイスラム教徒共に等しい権利を保護する、という事を強く求め、
譲歩がなされました。

ナポレオンもニコライも和解は望んでいませんでした。ナポレオンは、フランス帝国の拡大を視野
に戦争を望んでいましたし、ニコライはヨーロッパ、特にバルカン半島からイスラム教徒を追放す
るために戦争を望んでいました。バルカン半島におけるイスラム教の影響という種は、最近の
旧ユーゴスラビアの崩壊や、ボスニアの(多くがギリシャ正教徒である)セルビア人と(多くがイス
ラム教徒である)クロアチア人の間の長期間にわたるな虐殺など、何世紀にも及んで大量虐殺を
伴う戦争へと繋がってきました。

ニコライは、「フランスは、…トルコを単独で支援することなどありえない。オーストリアは、1849年
にプロシアの皇帝が十字軍に与えた支援への感謝によって、好意的中立の立場を堅持する。イ
ギリスは、ジョン・ブライトとリチャード・コブデンの「絶対平和主義」の影響力が優勢なので介入は
しない」と信じていました。「ニコライは、英国の積極的な支持すら望んでいた。1853年初頭、
ロシア軍が集結し、メンシコフ王子が皇帝(ニコライ帝)の(エルサレムの聖地に関する)最後通牒
をコンスタンティノープルへ届けるため派遣された」(同書460 ページ)

4月22日、フランス、ロシア、英国閣僚は聖地に関する合意に達しました。しかし、メンシコフは、
最後通牒をオスマン政府へ届け、同日、ロシア軍がバルカン半島を横断しました。このことは、
地域の平和を維持しようとしていた英国政府内に大きな動揺を引き起こしました。しかし、時すで
に遅く、ロシアは、オスマン帝国とイスラム教がバルカン半島から出て行くことを望んだのです。

こうしてクリミア戦争が始まりました。トルコ政府は、その年の10月初め、ロシアに対して宣戦を
布告しました。また、ロシアがドナウ河口に進出しなければ、現状を維持する、というニコライ帝へ
の明確なメッセージとしてフランスと英国はダーダネルス海峡に艦隊を派遣しました。ニコライはド
ナウで軍隊を止める意図は全くなかっただけに、これは彼にとって宣戦布告に等しいものでした。
ロシア海軍は、シノープ港でトルコの艦隊を攻撃し壊滅させ、フランス、英国の連合軍が国会に
艦隊を進める結果となりました。

英国とフランス軍が1854年にクリミアに上陸し、1856年、パリ条約が締結され戦争は終結しました。
条約の条項は次のとおりです。「ロシアは、トルコにおけるキリスト教徒保護に関するあらゆる
権利、ならびにベッサラビアが返還された(現在のブルガリア、ハンガリー、セルビア等の)ドナウ
公国に干渉する独占的権利を放棄する。ドナウ川の通行は自由となり、国際委員会の監視下に

置かれる。黒海は各国の商業船の航行は自由だが、軍艦の航行は禁止する。(ロシアとトルコ)
二つの帝国のアジア側の国境は変更されない。トルコはヨーロッパと協調することを認める」
条約はさらに、「(エルサレムの新教徒、カトリック教徒、ギリシャ正教徒を含む)キリスト教共同体
の大幅な地方自治」も認めています。ジッダやシリアでのユダヤ人やキリスト教徒へのイスラム
教徒の狂信的暴力の勃発がフランスの占領を招いたものの、結局は「レバノン」がその代わりに
自治を得ました。キリスト教徒の総督が3つの勝者によって任命され、その後何年もその
取り決めが維持されました。

皆さんが覚えておられるように、かつて「中東のパリ」と称されたレバノンのベイルートを破壊し、
多くの命を奪った残酷な内戦は、主マロン派キリスト教徒、ファランへと、イスラム原理主義者と
の間の衝突でした。1958年、米国はこの紛争に巻き込まれ、5月に海兵隊がレバノンに上陸して
から10月まで駐留しました。マロン派、ファランへ、その他キリスト教集団とイスラム教左派とパ
レスチナ集団の間でのレバノン内戦の歴史は残酷で嫌悪すべきものです。1975年から76年の
内戦で6万人以上が殺され、数十億ドルの損失となり、イスラエルはレバノンを2回占領しました。
1983年、米国大使館の爆弾テロで50人が殺され、同年4月18日には、兵舎への大規模な自爆
攻撃によって241人の米国海兵隊と58人のフランス兵士が殺されました。

今日でも、イスラエル兵はレバノン南部の一部占領を続けており、その地域では頻繁なテロ攻撃
に対してイスラエルが海や空から報復攻撃や一斉射撃を行い、50万人近い市民が家を失ってい
ます。

オスマン帝国は、第一次世界大戦でオーストリア、ハンガリー、ドイツに加わりましたが、1917年、
アレンビー将軍がトルコを陥落させたパレスチナでの英国の勝利という結果となりました。

「ユダヤ人の祖国」を与えるというバルフォア卿の宣言が受け入れられました。様々なカリフや(オ
スマンの)トルコ人は、この時まで何百年もパレスチナとエルサレムの支配下にありました。バグ
ダッドやオスマントルコ帝国のカリフ側が、独立した「パレスチナ国家」を与えるといった動きや、エ
ルサレムを政治的首都にするという動きがあったことはかつてありませんでした。バルフォア宣言
の結果、英国統治領パレスチナが樹立された1920年、ユダヤ人の大規模な移民が始まりました。
1930年、ユダヤ人がヒトラーのドイツやヨーロッパ諸国から脱出した難民と移民の波が押し寄せま
した。1922年には、ヨルダン川西岸の土地が英国統治領パレスチナから切り離され、「トランスヨ
ルダン」(後のヨルダン)となりました。

イスラエル、ヨルダンとパレスチナ難民

「ホロコースト(大虐殺)」の真実が第二次世界大戦末期に広く知られるようになると、文明社会は
驚愕しました。数百万のユダヤ人がドイツ国内や東ヨーロッパの強制収容所で組織的に餓死さ

せられ、ガス室で殺され焼かれたのです。アウシュビッツ、ブーヘンヴァルト、ダッハウ、マイダネク、ベルゼンなどの収容所の名前は、何世代もの心に深く刻まれています。エルサレムにある「ヤド・バシェム」というユダヤ人のホローコースト記念館ほど、来館者に衝撃を与える所はありません。ナチスの残虐行為を示す等身大写真が心に深く刻まれ、忘れがたいほど感情がかき乱されます。

数十の文献を調査すれば、この悪名高き期間について理解し得るでしょう。1947年、世界中が同情を寄せ、国連がパレスチナの分割を決議しました。大国が敵を分割するという試みは、最近ではユーゴスラビア崩壊後のボスニア・ヘルツェゴビナで行われようとした悲惨なケースがありますが、このような分割計画というものは、最初から失敗する運命だったのです。

国連はパレスチナで続く混乱を認識しており、問題を調査し、パレスチナ問題の適切な解決案を模索し提案を行うために「パレスチナ特別委員会」(UNSCOP)を設置しました。初期の大国のパレスチナ委任統治は即刻終結するべきであり、ユダヤ国家とアラブ国家という2つの国家を存在させて「経済連合」を創りだすが、エルサレムはどちらの国家にも属さない「分割案(corpus separatum)、分割した存在」としてどちらの国家の政治的首都にもならず、三大一神教の信徒が自由に行き来できる開かれた都市とする、というのが大多数の案でした。

アラブ側は提案を拒否しました。ユダヤ側は同意しましたが、エルサレムの除外には反対しました。UNSCOPの大多数の賛成により、1948年8月1日までにパレスチナ委任統治領から軍隊が撤退することを勧告する国連決議181号(11)が1947年11月29日採択されました。英国は実際に1948年5月14日にパレスチナからついに撤退しました。まさにその日、「ユダヤ全国臨時評議会」が「イスラエル国家」を宣言し、翌日国連事務総長に電報を送りました。

イスラエル人にとってこの宣言は、1776年のアメリカ独立宣言同様に重要なものです。以下抜粋です。「エレット・イスラエル(イスラエルの地)はユダヤ人の生まれ故郷だった…1897年、第一回シオニズム会議が…自身の国の復興というユダヤ人の権利を宣言した。その権利は1917年、バルフォア宣言で認められ、イスラエル人とエレット・イスラエルの歴史的繋がりに国際的な承認を与えた国際連盟の委任統治で再確認された。また、ユダヤ人が民族的郷土を再建するという権利については、1947年11月20日、国連総会でエレット・イスラエルにユダヤ国家を樹立することを求める決議が採択された。ユダヤ人が国家を樹立する権利についての国連による承認は、取消不能である。この権利は、他のあらゆる主権国家同様に、自身の宿命に打ち勝つためのユダヤ人の生得の権利である。

したがって、我々の当然かつ歴史的権利ならびに国連総会の決議により、ここにエレット・イスラエルにユダヤ国家、イスラエル国の建国を宣言する」

バルフォア宣言とは、実際は 1917年11月2日付のバルフォア卿からロスチャイルド卿への個人書簡でした。内容は以下のとおりです。

親愛なるロスチャイルド卿へ

陛下の政府に代わり、ユダヤ人のシオニスト運動に次のような支持を示す宣言をするとともに、あなたにそれをお伝えすることを光榮に存じます。この件は閣議に報告され承認を得ています。

陛下の政府はパレスチナにユダヤ人の民族的郷土を樹立することを支持します。そしてその目的の達成のため最大限の努力を払うものとします。これは、パレスチナの非ユダヤ系の人々の公民権と宗教的権利を侵害するものではなく、また他国に居住するユダヤ人が享受している諸権利及び政治的地位に損害をもたらすものではありません。

この宣言をシオニスト連盟に伝えていただければ幸いです。

(アーサー・ジェームス・バルフォア卿より)

1902年から 1905年にかけてと、1915年6月に英国首相だったバルフォアは英国政治家の長老の一人でした。彼は外相に就任し、上記の書簡を書いた年の初めに米国を訪問していました。

予想通り、この宣言に対して中東のアラブ諸国は大きな困惑と敵意を抱きました。1922年の英国委任統治開始時から、パレスチナには 83、790人のユダヤ人、71、764人のキリスト教徒、その他 7000人に対して約50万人のイスラム教徒が住んでいた、とアラブ人は主張しています。

1980年代初めに、私はヨルダンのアンマンの王宮を訪問し、フセイン王の兄弟でヨルダンの皇太子であるハッサン・ビン・タラル殿下と会談しました。殿下は、ご自身の著書「パレスチナの自決：西岸及びガザ地区の研究」にサインをして私に下さいました。この本は、パレスチナアラブ人の民族自決に関する主張の根拠を簡潔に記述しています。

これは著書の記述です。「1945年から 48年にかけての委任統治末期の混乱は、主に第二次世界大戦後のユダヤ人移民の再開によるものだった。ユダヤ人組織によって、パレスチナでの大規模なアラブ人の土地の取得や産業投資も行われた。1946年以来、アラブ人、ユダヤ人双方の共同体が武装部隊を結成し、お互いに、そして委任統治国に戦闘をしかけた。1947年までに、委任統治国がパレスチナで法と秩序をもはや維持しえない事が明白となった。その頃までに、人口統計の割合ではユダヤ人が大幅に優勢となり…結局、委任統治国政府は 1948年5月14日にパレスチナから軍隊を撤退させた」(同書60、61 ページ)

「お互いに戦闘をしかけた」のは武装部隊というよりむしろ、アラブ人がユダヤ人に、ユダヤ人がアラブ人と英国人双方に対してでした。英国役人が殺害や誘拐され、双方の多くの市民が死亡しました。

1940年代の「自由イスラエル戦闘団」は次のような言葉を記したポスターをイングランドに中東に揭げました。

イングランドの人々へ！

「我々の時代に平和を」と宣言した政府を持つ人々へ

これは警告である！

あなたがたの政府は、陛下の王冠をユダヤ人の血に浸し、アラブの石油で磨いた—あなたがたの政府は、エレッツ・イスラエル委任統治の各条項に違反し、国際法を侮辱し我々の国を侵略した。

アウシュビッツ、ダッハウ、トレ布林カはヒトラーとベリンの同盟に対して、そしてヒトラーの怒りが届かなかった生存者への殺人に対して「出エジプト」の道を開いた。

我々は断固決意する

二度とそうしたことは起こらないだろう！

我々は戦いを挑む

帝国の中心部に対して！

我々は攻撃する

我々の隷属と束縛に対する憎しみと怒りを抱いて

戦いの準備は出来ている

明日の隷属化への戦いを避けるために今解放のための戦いを行う

イングランドの人々よ！

あなたがたの政府に今すぐエレッツ・イスラエル(イスラエルの地)を放棄するよう要求するのだ！

あなたがたの息子や娘に家に戻るよう求めなければ二度と子供達に会えなくなるだろう

ユダヤ人は、英国政府にホロコースト(ユダヤ人大虐殺)の責任の一端があると非難し、英国の人々に警告を突きつけました。英国政府は、ユダヤ人のパレスチナへの移民を取り締まり、何万人もの戦争の生存者を南フランスやキプロスに拘束し、ハイファの港で難民を満載した「違法」船の入港を拒否したのです。

ポスターは、ロンドンや大英帝国の他都市での暴力を実行すると脅しました。「出エジプト」の映画で描かれているように、多くのユダヤ人がイスラエルを目前にして拒絶された際に死亡しました。彼らはヨーロッパから彼らを乗せてきた古い貨物船の甲板から飛び込み岸へ泳ぎ着こうと試みたのです。

パレスチナから英国が撤退する以前にも、アラブ人とユダヤ人の間で流血の武力衝突がありました。「ハガナ」「パルマツハ」「イルグン」などのユダヤ人の組織は、占領国である英国やアラブ人に対してテロ攻撃や暗殺を実行する組織として知られていました。アラブ人も同様に、パレスチナの地への、彼らが「不法移民」とみなす急増するユダヤ人に対して暴力行為をしかけました。英国パレスチナ委任統治が第一次大戦後の1920年に国際連盟で承認されると、暴動が起きました。翌年そして1929年、1936年と何度も暴動が発生し、絶え間ない暴力が第二次世界大戦後も続きました。英国はついに、パレスチナの責任を国際連合へ委任することで、自ら国際連盟による委任統治問題を放棄しました。19世紀後半には、シリアやレバノンからパレスチナへの大規模なアラブ人の移民も行われました。

英国が1948年に撤退し、イスラエルが主権国家の宣言をした際、アラブ6カ国が小さなイスラエルを攻撃しました。エジプト、ヨルダン、レバノン、シリア、イラク、サウジアラビアが建国されたばかりのユダヤ人国家を破壊しようとしました。後に映画化されたレオン・ユーリスの「出エジプト」という有名な本では、戦後のユダヤ人のイスラエルへの移民や独立戦争について迫真の描写をしています。

現在に至っても、海岸沿いの平野からエルサレムに向かって険しい曲がりくねった高速道路を運転すると、かつてエルサレムを目指して戦った、鉛丹ペンキで塗られた装甲護衛車隊の残骸が記念物として保存されているのを見ることができます。多くのイスラエル人が死亡しましたが、最終的には数多くの車両が西エルサレムを囲み必死で防衛する敵への到達に成功しました。この護衛車隊が高台の道の両側に隠れていたヨルダンの軍隊を打ち破ることが出来なかったならば、とても異なった断章が歴史に刻まれていたことでしょう。

古代の道や予期しない方向からアラブ人を驚かせた軍隊の逸話とその戦争の歴史の中で語られています。

アラブ連合軍が意図したような、全滅や「海へ追い詰められる」代わりに、イスラエルは領土を得ました。1948年のイスラエルの「独立戦争」に続いて、非常に重要なことですが、エジプトがガザ

ちく せんりょう 地区を占領し、ヨルダンがヨルダン川西岸とエルサレム旧市街を占領しました。1948年から1967
ねん ねんかん こくれんぐん しょこく あいだ ひぶ そうちたい ちゅうりゅう 年までの19年間、国連軍がアラブ諸国とイスラエルの間の「非武装地帯」に駐留しました。この
ちいき ちゅうかんちたい せんげん どのう つ なら ゆうしてっせん は 地域は「中間地帯」と宣言され、土嚢に積まれたマシンガンがずらりと並び、有刺鉄線が張られま
しろ ぬ こくれんぐん しゃりょう ちいき ひんぼん こうげき はっせい した。白く塗られた国連軍の車両がこの地域をパトロールしていましたが、頻繁にテロ攻撃が発生
しました。ガリラヤ湖近くで畑を耕作していたイスラエル人の農民達がゴラン高原の険しい
き た がけ かく じん じゅうげき はんとう 切り立った崖に隠れたアラブ人によって銃撃されるなど、エジプトやシナイ半島、シリア、ヨルダン
こうげき かいし でテロ攻撃が開始されました。

はんとう しんりやく ねん あら せんそう お えいこく イスラエルがエジプトのシナイ半島を侵略し1956年にまた新たな戦争が起こりました。すぐに英国
さんせん がつ か こくれん ていせん と とフランスが参戦し、11月6日に国連が停戦を取りまとめました。

おうこく がわせいがん せんりょう こ みわた こうげん ヨルダン・ハシミテ王国はヨルダン川西岸を占領し、シリアはガリラヤ湖を見渡すゴラン高原を
せんりょう 占領しました。

かこく せいふ ちいき どりつこっか せつりつ とうごう ていあん アラブ3カ国の政府は、この地域にパレスチナ独立国家の設立、あるいは統合といった提案をし
せんでした。ヨルダンにとって観光が収入源であったのもひとつの理由でした。都市の中でもエル
きゅうしがい きゅうかちゅう おうべい じゅんれいしゃ サレム旧市街、ヘブロン、ベツレヘムはクリスマスやイースター休暇中は欧米からの巡礼者で
こんざつ ゆうすう かんこうち 混雑する有数の観光地でした。

ちく ちゅうりゅう こくれんきんきゅうぐん てったい もと けっか ねん せんそう はじ エジプトがガザ地区に駐留している国連緊急軍の撤退を求めた結果1967年の戦争が始まりま
した。国連はエジプトの要求を黙従し、エジプト軍は直ちにガザを再び占有し、イスラエル船舶が
こくれん ようきゅう もくじゅう ぐん ただ ふたた せんゆう せんぱく 通行するアカバ湾を封鎖しました。再び、アラブ連合軍がイスラエルの国の破壊を目指したので
す。イスラエルはせいみつばくげき こうげき こくない はんとう くらぐん 精密爆撃とロケット攻撃によって、エジプト国内とシナイ半島のエジプトの空軍
き ち はかい ほうげきじんち かずおお こうくき げきつい ゆうめい はんとう どうげ たたか 基地を破壊し、砲撃陣地で数多くの航空機を撃墜しました。有名なシナイ半島・ミトラ峠の戦いで
は、イスラエルのせんとうき あいろ ぐん せんしゃだいたい かいめつてき だげき あた 戦闘機が隘路でエジプト軍の戦車大隊をとらえ、壊滅的な打撃を与えるというめ
ざましいしょうり勝利をおさめました。イスラエルは、ゴラン高原の大規模なシリア軍に対してもしょうり勝利し、ヨ
ルダンのさばくぶたい きゅうしがい がわせいがん はいじょ か こくれん 砂漠部隊をエルサレム旧市街とヨルダン川西岸から排除しました。6日後、国連によって
せんとうこくかん ていせん こうい いた 戦闘国間の停戦が合意に至りました。

げんざい がわせいがん こ みわた こうげん はんとう ちく せんりょう イスラエルは現在ヨルダン川西岸、ガリラヤ湖を見渡すゴラン高原、シナイ半島、ガザ地区を占領
しています。

ふたた ねん しょくざい ひ しかし、エジプトとシリアは再び、1973年、贖罪の日である「ヨーム・キップール」にイスラエルに
でんげきこうげき し か ぐん ながねん うん がとうがん ゆうめい こうちく 電撃攻撃を仕掛けました。イスラエル軍は長年スエズ運河東岸に有名なバーレブ・ラインを構築し
てきました。ぼうぎようさい だいいちじたいせんご おお ほうだい そな つ すうひやく 防御要塞という、第一次大戦後に、コンクリートの大きな砲台を備え付け、数百マイ
ルに及んでブルドーザーで盛り土をし、防御拠点を連結したジークフリートやマジノ線を
おも お 思い起こします。

エジプト軍は、高圧ホースや壁を破壊する装置を前線に送り込むことに成功して、バーレブ・ラインを突破し、シナイ半島へ進出しました。この血なまぐさい戦争の初期段階では、イスラエルの戦車隊がゴラン高原でシリア軍に大反撃して撤退させるまで、シリア、エジプトが優勢に思えました。イスラエル軍は、スエズ運河を南へ渡り、ソビエト連邦をはじめとする主要国が停戦を求めていることをうけてカイロへ向かっていたエジプト第3部隊を出し抜きました。イスラエルは1974年スエズ運河西岸から撤退しました。アンワール・サダト氏が当時エジプトの大統領でした。ここで、私が、今後起こりうる大きな出来事に影響を及ぼすと思っている個人的経験から、私見を述べたいと思います。

サダト下のエジプト

1967年に6日間戦争がはじまった際、父と私はエルサレムに向かっていた。パサデナを出てイギリスに入り、私達のラジオ番組を初めて中東で放送するためにエルサレムへ向かう準備をしていました。ヨルダン放送公社の代表、アドレー・ムータディ氏が当時はヨルダン領のエルサレムでのラジオ局との連絡を調整してくれていました。私達は、神の国の福音がアラブ人所有の中東のラジオ局から説かれるということに奮い立ち高揚しており、父と私は幾つかの放送開始番組を自ら担当するつもりでした。ところが、突然戦争が始まり、私達の個人的に親しい友人であるムータディ氏は素晴らしい家を失い、アンマンに戻りました。ラジオ局はもはやヨルダンのものではなく、戦争によって私達のその地域での放送計画もなくなってしまいました。

ムータディ氏はパレスチナアラブ人で、素晴らしい家族を持ち、その家族の何人かは米国に住んで仕事をしています。彼とサイダ夫人は1997年にタイラー近くの私達の事務所を訪ねてくれました。彼は中東の指導者の中でも傑出した人物で、ヨルダン政府の顧問をしています。彼の長女は、フセイン国王の兄弟、ハッサン・ビン・タレル皇太子の個人秘書をしていました。1976年後半、私がサダト大統領との一連の特別会談の調整を彼に依頼した際には、彼はエジプトへ行き、会談の設定に取り掛かってくれました。彼は、サダト氏と個人的に会談する前に多くの政府高官に会う必要があると私に話してくれました。

二度目の訪問でついにエジプト大統領と大統領夫人との会談が実現しました。最初の訪問では、ムータディ氏が、(後にキプロスでテロリストに暗殺された)エジプト議会議長、カイロの日刊紙「アル・アラム」の発行者、数人の閣僚級議員を含むエジプト政府の主要高官達との会談を設定してくれました。私は自分の見解について、全ての問題についてどちらの側に対しても公正であり完全に「政治とは無関係」であることを相手側に認識してもらうことを望んでおり、その点でもこのような彼らとの会談がエジプト政府を安心させるために必要でした。私は当時カイロに住んでいた前の国連事務総長、ブトロス・ブトロス・ガリ氏の自宅での夕食に招待されました。

二回目の訪問で、私はカイロでジハン・サダト大統領夫人と、そしてカイロ郊外の大統領宮でアンワール・サダト大統領と、それぞれ会談することが出来ました。私達の撮影隊は、スエズ運河、ピラミッド、カイロとエジプト中で何百フィートもの映像を撮影しました。こうして「サダト下のエジプト」という1時間の特別番組と、30分の会談を抜粋した番組が全米で放映されました。

私のサダト大統領への質問は中東、エジプト、イスラエル、その他アラブ国家に関する、過去の戦争と未来について、私が彼らの視点を、公正にカメラの前での正式な会談で報じるという自信を持って行いました。私は、サダト大統領と何の束縛もない自由な討論をする機会を得ました。サダト氏は、自分の過去、家族、ヨム・キッパ戦争でエジプト軍の将校であり戦闘で亡くなった弟について、しみじみと語りました。「弟は私にとって息子のような存在だった」とサダト氏はとても年の離れた若い弟の世話をしたことを話してくれました。弟を失うという悲しみに心を打たれているようでした。サダト氏は、弟がエジプトのために戦って、英雄としてどのように亡くなったのかを語りました。サダト氏の額の真ん中には、イスラム教徒として一日5回のお祈りをする事によってできる「たこ」がありました。カイロの街中に貼られたサダト氏の写真や報道写真では、はっきりと「たこ」がわかりました。サダト氏は会談やその後の討論の間、パイプを吸っていました。彼の声は低音のガラガラした声でした。

感じが良く、好感の持てる、知性的な、大衆の味方であるアンワール・サダト氏は、ナイル川沿いの小さな村で生まれ、エジプト軍の将校となりました。ガマル・アブドル・ナセル大統領の政権時に副大統領となり、ナセル大統領の死後、1970年に後を継ぎました。

彼はロシア人にエジプトからの退去を命じたことを誇りとしていました。モスクワへの密かな訪問や、エジプト軍がいかに装備や部品でソビエトに依存しすぎていたかを話してくれました。ソビエトはエジプト国内に多数の外交官や軍事顧問を置くことで強い影響力を行使しようと企てていました。彼らのそうした態度に怒りをおぼえ、サダト氏はソビエト人に荷物をまとめて出て行くよう命令したのです。彼はそのような事を行った唯一の近代指導者でした。数多くのソビエト人とその関係者がわずかに数日中にエジプトを強制退去させられました。

ジハン夫人は、ニューヨークへの初めての旅行について話してくれました。娘と一緒にいったニューヨークで彼女はアメリカの活力と力強さに大変圧倒されました。米国の個人的な印象について、帰国後サダト氏に、「アンワール、どうして私達はあの人達と戦っているの？」と尋ねたそうです。もちろん、彼女は実際の戦闘ではなく、米国が長年に渡ってイスラエルを支持し続けていることに関する政治的論議について触れたのです。

私は、会談で尋ねた質問以外にサダト大統領に特に何かを述べるつもりはありませんでしたが、会談の時期が良かったように思えます。2年前にイスラエルはシナイ半島をエジプトに引渡しており、これによってエジプトは国内の石油供給のみならず、石油輸出国となることも可能になりました。

た。この事はイスラエルにとって、大きな融和的意思表示でした。カメラの前での会談では、私が強く思っていたこの地域の地政学的な領域を採り上げることができました。私は「大統領、なぜイスラエルを訪問されないのですか？行きますよ、と彼らに伝え、飛行機に乗って、訪問されてはいかがですか？中東に平和を訪問されて、もたらした偉大な指導者として歴史に名を残されるでしょうに」と言いました。

私はサダト氏にエジプトが人口、労働力でアラブ最大の国家であることを話しました。「イスラエルは専門委員会のようなものです。人口一人あたりの、科学者、教育者、医師、技術者達の割合が非常に高いのです。相互利益と繁栄のために、どうしてエジプトの大きな労働力とイスラエルの技術や専門性を結びつけないのですか？」と尋ねました。

私は、戦争の悲劇について、また平和的な協力関係を構築することの大きな利益についても暫し話しました。カイロのいたる所で目にした貧困や不潔さについては語る必要はありませんでした。

サダト氏はイスラエルへ行けない理由について、特定の組織名は出さずに、もしイスラエルを訪問すれば、その組織がエジプト国民の間に激しい怒りを扇動しかねないこと、サダト氏自身の支援者が裏切られたと感じかねないこと、彼の政治的な敵がそうした動きを自分達の利益のために利用しかねないことなどを挙げました。またイスラエル人に断固拒絶されるのではないかと感じていました。私は特にこう言ったのをよく覚えています。「しかし、あなたが行って、彼らに個人的な対話をしに来たと言ったら彼らはどうするでしょう？ エジプト大統領の個人的な飛行機を撃墜したりはしないでしょう！」私はどうすれば中東全体が世界情勢で主要国となり得るかについて独り言を言っていました。「全てのアラブ国家とイスラエルが真の協力関係を構築して「中東合衆国」のようなものを創立することができれば素晴らしい利益をもたらすでしょう」

長時間にわたる私達の会談も終わりを迎えました。私には会談の記憶がずっと鮮やかに残っています。今にして思えば、サダト氏の後の行動に繋がるような、彼の心に何らかの思いの種を私が植えたのだろう、と思わずにはいられません。私達の会談のわずか数ヵ月後の1977年11月、アンワール・サダト大統領は突然エルサレムを訪問し、イスラエルのベギン首相に会いました。

キャンプデービッドでの会談が続いて行われました。ホワイトハウスで「キャンプデービッド合意」が調印され、1979年3月26日、エジプトとイスラエルの間で正式な和平協定が調印されました。

サダト大統領がワシントンを訪問中、私と妻にサダト氏を主賓とした晩餐会への正式な招待状が届きました。私達は招待を受け、ワシントンへ赴き他の何十人かの出席者に合流しました。

私と妻が他の多くの賓客と共に広い階段を上っていくと、正装したサダト氏が出迎えの列におられました。ジハン・サダト夫人が私達を暖かく迎えてくださり、私達の丁度前の紳士との挨拶を

お 終えたばかりのご主人の方を向いて言われました。「アンワール、ガーナー・テッド・アームストロングご夫妻ですよ！」

サダト大統領は、「もちろんわかっていますとも！」と、とても温かい握手をしてくださいました。私は、かつてダラスのパーティで出会ったヘンリー・キッシンジャー博士に、サダト氏が私達のカイロでの会談で「私はヘンリーを信じています」と言われたのを伝えたことをお話ししました。キッシンジャー氏がニクソン政権で国防長官を務めていた時にサダト氏はヘンリー・キッシンジャー氏と多くの会談を行ったそうです。話をする時間はあまりなく、まもなく晩餐会場へ移動しました。そこで、私はネルソン・ロックフェラー上院議員、サイラス・バンス元国防長官、フーベルト・ハンフリー上院議員など数多くの政府高官や、ABC放送のバーバラ・ウォルターズにも会い握手をしました。政府高官達はそれぞれが私のテレビ番組をよく見ていると言ってくれました。当時、私達の番組はワシントンの主要局で良い時間帯に放送されていたのです。

それからわずか2年後の1981年、アンワール・サダト氏の残忍な暗殺をテレビで見た私は深く衝撃を受け悲しみに沈みました。彼は軍将校の制服を着て、1ヶ月前の9月に過激イスラム原理主義者達の取り締まりを行ったエジプト軍を閲兵していました。素晴らしく晴れた10月のカイロで、アンワール・サダト氏にとって誇らしいその日に、突然、数人の兵士が彼の前行く隊列を通り過ぎて観閲席へ駆け寄り、自動小銃を群集に乱射し始めたのです。サダト大統領は立ち上がり彼らに向かって手の平を突き出し、「やめろ！」と叫びましたが数発の銃弾がサダト氏に撃ち込まれました。何名かの暗殺の共謀者が逮捕され、ホスニ・ムバラク副大統領がアンワール・サダト氏の後を継ぎました。

他のアラブ国家と違い、エジプトはイスラム原理主義者やテロリストを取り締まってきました。1990年代、多くのイスラム教徒のテロリストが逮捕され、処刑されました。ムバラク大統領自身も1995年6月のエチオピア訪問時、辛うじて暗殺をまぬがれました。エジプト政府はその暗殺未遂に関してスーダン人の原理主義者を非難しています。神の言葉によると、エジプトは近い将来大きな出来事でその存在が目立つことになるようです。ダニエル書の11章では、将来、大きな北方の勢力がエジプトを侵略してパレスチナを占領し、その本拠をエルサレムに置くという時の詳細を記しています。

「終わりの時(この預言はある意味、日時を告知しています。それは「終わりの時」に起こるのです)南の王(これはプトレマイオス朝とセレウコス王朝期のエジプトをさします)が戦いを交える。北の王は多くの戦闘馬車、騎兵、船を率いて彼を襲撃し、国々に進入し、みなぎりあふれ、通り過ぎる」

「彼は美しい国(パレスチナ:現在のイスラエル)に攻め入り、多くの国々が倒れる。しかしエドム(おそらくトルコ)とモハブ(おそらくイラク)、またアモン人(おそらくヨルダン。ヨルダンの首都アンマン)のおもだった人々は、彼の手から逃れる」

「彼は国々に手を伸ばし、エジプトの国も逃れることはない」

「しかし、彼は金銀の宝とエジプトのすべての宝を手に入れ、ブル人とエチオピア人(クシュとされています。これは現在のリビアやエチオピアよりもパキスタンやインドのことでしょう)が彼に従う」

「しかし、東と北(ロシア、中国が北と東に位置しています!)からの知らせが彼を脅かす。彼は、多くの者を絶滅しようとして、激しく怒って出て行く(この世界終末戦争の結末は、ヨハネの黙示録 16:12-16 です)」

「彼は、海と聖なる美しい山との間に(死海と地中海の間、エルサレムです!)、本営の天幕を張る。しかし、ついに彼の終わりが来て、彼を助ける者はひとりもない」(ダニエル書11章40-45節)

聖書の預言の中でも最も長いこの預言で何度も言及されている「北の王」とは、アレクサンダー大王の帝国を彼の死後分割したセレウコス王朝の王の一人です。結局、ローマ帝国が世界を支配し、パレスチナとエジプトを占領しました。

ダニエル書11章の預言は、中央ヨーロッパからの最後の獣の勢力である「北の王」がパレスチナに攻め入り、シリア、レバノン、イスラエルを占領し、エジプト、サウジアラビアやその他湾岸諸国、そしてパキスタンやインド国境へ至る所まで侵攻するだろうとはっきりと示しています。このような勢力が世界の石油供給の大部分を握るだろうということを意味しています。

何十年間も、自称予言者達は、ソビエト連邦がパレスチナを侵略すると予言してきました。これは「北の王」がヨーロッパの主要10カ国よりもロシアを意味しているという仮定によるものでした。冷戦が最も深刻だった頃、世界が、米国とソビエトが核戦争の瀬戸際だと思ったケネディとフルシチョフのキューバミサイル危機の時さえ、42年以上もの間、私はロシアと米国の戦争など予言されていないと繰り返し言うてきました! 私は、ラジオやテレビを通じて、また多くの聴衆の前で、ロシアとの戦争はありえないと言っていました。

代わりに、私は、多くの国での現在の政府の崩壊や軍事独裁政権の出現に続いて「欧州連合」が最終的にヨーロッパにできるだろうと強調し続けていました。

エルサレムやパレスチナ、中東に関するあらゆる予言を真に理解するためには、イエス・キリストがオリーブ山から弟子たちに伝えられた長い「オリーブ山」預言を正確に理解しなければなりません。エルサレムとパレスチナの地を踏みにじってきた数々のたくさんの戦争には常に宗教的な理由がありました。キリストが言われ、ダニエル書やヨハネの黙示録で預言された最終紛争も同じでしょう。

パレスチナ難民

何十年も、何万人ものパレスチナアラブ人は難民キャンプで貧しく不潔な状態の暮らしをしてきました。1967年の6日間戦争の直後にはレバノン、シリア、ヨルダン、エジプトに難民キャンプがありました。

現在、このような難民キャンプで生まれた、あるいは10代、20代、30代前半を過ごした何万人もの若きアラブ人がレバノン南部やガザ地区にいます。彼らは両親や仲間達からずっと憎しみを植えつけられてきたのです。

最近のガザ地区やヨルダン川西岸での暴動についてのテレビ報道を見ると、若者がイスラエルの警官や兵士に石やビンを投げているのをほぼ必ずといって良いほど目にします。双方のテロ行為がさらなる怒りと憎しみを増幅させ、若いアラブ人の心に報復のための理由を芽生えさせます。

最近では、若いアラブ人が肩に、銃弾やゴム弾で命を落とした仲間の遺体が入った、パレスチナの旗をかけた棺をかつぎ、大きな声で怒鳴り、身ぶり手ぶりを交えて嘆き悲しむ光景を目にするのが日常的になりました。

何万人もの心に、燃えるような憎しみが生まれ、ひとつの憎しみがまた別の憎しみを煽ります。

パレスチナの大義である独立国家に関してアラブ諸国が言葉による支援や実際の支援をしていますが、それは近隣アラブ諸国がパレスチナ人を自国に受け入れることを容認するものではない、ということに注意し理解しておかなければなりません。長年にわたり、何十年間も、パレスチナアラブ人はイスラエル国境の「難民キャンプ」に暮らしてきました。これには次のような明らかな悲しい理由があります。1つ、アラファト議長のPLO(パレスチナ解放機構)が人々を難民キャンプに居させることで彼らの窮状をうったえる、つまり1967年にイスラエルに占領された貴重な土地「占領地域」にいつでも戻る用意ができているということを世論に訴え続けようとしたこと。2つ、キャンプが激しい憎しみの温床となっており、イスラエルへのテロ攻撃の起点となってきたこと。3つ、アラブ諸国がパレスチナ人難民を受け入れることを認めなかったこと。

パレスチナアラブ人は積極的、知性的かつ力強い人達です。何万人もが(湾岸戦争中に反イスラエル感情によって多くが国外退去させられた)サウジアラビアなどで仕事につき、ガザ地区や難民キャンプの家族を養うために仕送りをしています。

イスラエル軍の歴史上、最も汚点となる出来事が、1982年9月16日に起こりました。イスラエルは、PLOがレバノン国内の拠点からあからさまに活動をしているとして、陸・海・空同時攻撃を行いレバノンに侵攻しました。PLOの拠点がベイルートにあったのです。シリア軍がベカー高原南部でイスラエル機甲部隊と交戦しましたが、結局イスラエルが8月21日までにベイルートを包囲しました。レバノンに新政府が樹立されました。マロン派キリスト教徒が非常に人気の高い指導者バシール・ジュマイエルを選出したものの、彼は9月14日に爆弾によって暗殺されました。怒りにかられたファランヘ党が2つの難民キャンプへ押し入り数百人の男女、子供を殺害しました。

イスラエル軍がキャンプを包囲していましたが、イスラエル兵は銃撃の音を聞いておらず、軍の将校がレバノン人のキリスト教徒の難民キャンプへの侵入を許したとして非難されました。怒りと反抗の波がイスラエルに湧き起こりました。イスラエル軍の精鋭達は初めて、兵士やパイロットが上官の命令に反抗するという事態を経験しました。

多くのイスラエル爆撃機が、命令された爆撃目標が真実かどうか信頼できないと言って爆弾を海に投下しました。彼らが爆撃していたのはテロリストだったのでしょうか？ それとも無力な市民だったのでしょうか？

南レバノンでは戦闘が続いていました。1993年、イスラエルは空爆と連続砲火でその地域のゲリラ拠点を反撃し、20万人以上が家を失いました。1996年にイスラエルは再びテロリストの拠点を攻撃し、50万人近い人々が住処を追われました。問題はまだ解決されていません。このような攻撃が人々を「巻き添え」死させたり負傷させ、パレスチナアラブ人難民の間に新たな暴力を生み出すのです。その後、別のテロ攻撃が計画、実行されました。ロシア製の「カチューシャ」ミサイルが発射され、再びイスラエルの報復空爆、砲撃を招きました。

預言におけるエルサレム

エルサレムと中東を今後何が待ち受けているのでしょうか？ イエス・キリストはエルサレムが破壊される時が来ると預言しました。それは偽預言者が「神の神殿」において自分が神の力を持つと宣言し、エルサレムは軍隊に包囲されるだろうと、イエス・キリストは預言されました。

全ての預言は、先に起こる、「象徴的な」ものの実現と、後で起こる、文字どおりの実現の二重となっていることを覚えておいてください。テス軍がキリスト昇天の約40年後にエルサレムを大規模に破壊しました。しかし、寺院には偽預言者もおらず、天の印もなく、イエス・キリストは

復活されませんでした！しかし、マタイ 24 章のキリストの預言の多くは、これらの実際のできごとを無視した想像力に富んだ出来事だと扱っています。

マタイ 24 章の全てを学ぶと、戦争や戦争の噂、干ばつ、飢餓、伝染病など地球を取り巻くあらゆる出来事がイエス・キリストの再来につながっている事に気づきます。

キリストは紀元 71 年に復活されませんでした！テトス軍は、死と破壊をもたらしましたが「石がくずされずに、積み残されたまま残ることは決してない」ほどエルサレムを完全に破壊はしませんでした。したがって、当時のエルサレムの破壊は、預言されていた、あるいはキリストの預言が文字通り実現される前の「象徴的な」実現でした。

イスラエルのユダヤ人政府が、エルサレムを再び彼らの国家の首都とすると宣言することを決めたとき、彼らは、以前分割された市の完全な統合に着手しました。水道、電線、電話線、下水、街路、バスの運行路線といった市の構造基盤が統合され始め、エルサレムはひとつの大きな市となりました。

数年前、私がエルサレムで長年市長を務めるテディ・コレック氏と会談した際、私はカメラの前で、イスラエルが、東エルサレムをアラブ人に返還することで「土地を平和と交換する」ことを考えたことがあるかどうか尋ねました。彼は、2 度、力強く繰り返しました。「1 インチたりともやるものか！1 インチたりとも！」その後、政府も同じ事を繰り返しました。ネタニヤフ政権は、何度も繰り返し、エルサレムに関しては、パレスチナのアラファト議長が執拗に主張しようとも、「交渉の余地などない」と言ってきました。三大一神教にとって、エルサレムは世界で最も重要な都市のひとつです。キリスト教徒は「聖なる都」と呼び、シオニストや正統派ユダヤ教徒にとっても最も聖なる場所であり、イスラム教徒にとっても聖なる場所のひとつです。

聖書の預言はエルサレムや世界の平和を予言していますが、イエス・キリストはエルサレムがキリスト再来の前に完全に破壊されるだろうと示されました！恐ろしく聞こえますが、パレスチナでユダヤ人の大虐殺がまた起ころうとしています！エルサレムは人類史上最後の大戦の火種となるのです。それは、第三次世界大戦という、世界最終戦争へとつながる最終段階なのです。

有名な「オリーブ山の預言」でイエス・キリストは、来る大きな試練はエルサレムでの出来事が引き金となるだろうと予言されました。「イエスが宮を出て行かれるとき、弟子たちが近寄って来て、イエスに宮の建物をさし示した」

「イエスは彼らに言われた。「これら万物がお分かりになるかな？あなたがたに告げます。ここでは、石がくずされずに、積み残されたまま残ることは決してないでしょう」

「イエスがオリーブ山^{さん}ですわっておられると、弟子^{でし}たちがひそかにみもとに来て言った。「お話し^{きい}ください。いつそのようなことが起こ^おるのでしょう。あなたの再来^{さいらい}の時^{とき}や世^よの終^おわりには、どんな前兆^{ぜんちよう}がある^あのでしょうか」(マタイによる福音書^{ふくいんしょ}24章^{しょう}1－3 節)(原語^{げんご}の)ギリシャ語^ごでは「時代^{じだい}」を意味^{いみ}しています。

「イエスは彼^{かれ}らに答^{こた}えて言^いわれた。人^{ひと}に惑^{まど}わされないように気^きをつけなさい」

「わたしの名^なを名^なのる者^{もの}が大^{おお}ぜい現^{あら}われ、私^{わたし}こそキリストだ、と言^いって、多^{おお}くの人^{ひと}を惑^{まど}わすでしょう」

「また、戦^{せんそう}争^{そう}や、戦^{せんそう}争^{そう}のうわさを聞^きくでしようが、気^きをつけて、あわてないようにしなさい。これらは必^{かなら}ず起^おこることです。しかし、終^おわりが来^きたのではありません」

「民族^{みんぞく}は民族^{みんぞく}に、国^{くに}は国^{くに}に敵^{てきたい}対^{たい}して立^たち上^あがり、方^{ほう}々^{ぼう}に飢^き饉^{きん}や伝^{でん}染^{せん}病^{びょう}、地^じ震^{しん}が起^おこります」(マタイによる福音書^{ふくいんしょ} 24章^{しょう}1－7節)

「戦^{せんそう}争^{そう}や干^{かん}ばつ、飢^き饉^{きん}などずっと起^おこってきたことであって、このよう^{すべ}なことは全^{じゆんかん}て循^お環^{かん}して起^おこるものだ！」と馬^ば鹿^かにしてあざ笑^{わら}う人^{ひと}達^{たち}もいます。

しかし、キリストは、こ^{すべ}うした全^{わがわい}ての禍^き はその規^ほ模^まを増^まし、これま^{じんるい}での人^{だい}類^{さん}の大^{じすべ}惨^{ちようえつ}事^じ全^じてを超^{ちようえつ}越^{えつ}するほどの苦^く難^{なん}が起^おこると預^お言^{よげん}されています。

それからキリストは、彼^{かれ}の真^{しん}の信^{しん}奉^{ぼう}者^{しや}達^{たち}に起^おこる宗^{しゆ}教^{きやう}的^{てき}迫^{はく}害^{がい}を述^のべられま^でした。弟^で子^し達^{たち}に、神^{かみ}の人^{ひと}々^とを殺^{ころ}す者^{もの}がそれ^{かみ}を「神^{かみ}へ^{ほう}の奉^{ほう}仕^しだ^{かんが}と考^{とき}え^{かた}る」時^{とき}がく^{かた}るだ^おろ^そうと語^{かた}られま^おした。この恐^おろ^そしい戦^{せんそう}争^{そう}の時^{とき}につい^いて、イエスは言^いわれま^{かな}した。「それ^はら^はは^はみ^はな^は悲^{かな}し^はみ^はの始^{はじ}まり^はなの^はです」

「彼^{かれ}ら^は、あ^くなた^くが^くた^くを苦^くしい目^めにあ^くわ^くせ、殺^{ころ}しま^{ころ}す。また、私^{わたし}の^な名^なのた^なめ^なに、あ^{わたし}なた^なが^なた^なは^なす^なべ^なての^な国^くの人^{ひと}に憎^{にく}まれま^{にく}す」

「そ^おして、多^{かんじやう}く^{がい}の^たひ^{うら}と^ぎび^{にく}と^あが^あ感^あ情^あを^あ害^あされ、互^あいに^あ裏^あ切^あり、憎^あみ^あ合^あいま^あす」

「また、多^おく^にの^に偽^に預^に言^に者^にが^に現^にれ^に多^にく^にの^に人^に々^にを^に惑^にわ^にしま^にす」

「不^ふ法^{ほう}(神^{かみ}の十^{じゆ}戒^{かい}を破^{やぶ}る^{やぶ}こと)が^おは^おび^おこ^おる^おので、多^おく^おの^お人^おの^お愛^おが^お冷^おえ^おる^おであ^おろ^おう」

「し^{さい}か^ごし、最^た後^しま^ので^{もの}耐^{すく}え^{すく}忍^{すく}ぶ^{すく}者^{すく}は^{すく}救^{すく}われま^{すく}す」

「この王^{おう}国^{こく}の福^ふ音^{おん}は^ふ世^せ界^{かい}の全^{すべ}ての^{くに}国^{もく}が^{げき}目^{つた}撃^{つた}する^おた^ひめ^ひに^お伝^おえ^おられ、そ^おれ^おか^おら、終^おわ^おり^おの^お日^おが^お来^おま^おす」(マタイによる福音書^{ふくいんしょ}24章^{しょう}8－14 節) 神^{かみ}は^{かみ}世^せ界^{かい}に^{かみ}神^{かみ}の^{おう}王^{こく}国^{たん}が^{じやう}誕^{たん}生^{じやう}する^{せんげん}とい^{とお}う^{とお}宣^{せん}言^{げん}を^{とお}通^{とお}し^{とお}て^{とお}の^{とお}み^{とお}！今^{いま}起^おこ^おっ^おて^おい^おる^お人^お間^{にんげん}の^{じしやう}事^{かい}象^にに^に介^に入^にさ^にれ^にて^にい^にる^にの^にです^に！

神はテル・アビブやエルサレムでの悪夢のような自爆攻撃を止めようとはされません！テロや殺人、旧ユーゴスラビアを分裂させたような大量虐殺戦争を未然に防がれません。神は人間の事象に助けの手を差し伸べられることはありません！神は、あかしとして福音を説き、世界に警告して教え導くことによつてのみ介入されるのです！

偽預言者や宗教的迫害について警告された後、キリストは続けられました。「それゆえ、預言者ダニエルによつて語られたあの「荒廃をもたらすおぞましき者が、聖なる場所に立つのを見たならば、読者よ悟れ！

「そのときは、ユダヤ(エルサレムとユダヤのかつてのローマ帝国の地方)にいる人々は山へ逃げなさい」「そのときには、世の初めから、今に至るまで、いまだかつてなかったような、またこれからもないような、大いなる患難が起るからです」

「その期間が(神の介入によつて)縮められなかったら、ひとりとして救われる者はないでしょう。しかし、選ばれた者のために、その期間は縮められます」(マタイによる福音書24章4-22節)明らかに、このキリストの預言では、来るべき大量破壊的な恐ろしい戦争を神が介入して短縮されなければ、全人類は滅びるだろうと言われています！

アラブ人と「第三世界」諸国による大量破壊兵器入手のための狂気の競争

ソビエト連邦が崩壊した時には、何百万ものアメリカ人が大きな安堵のため息をつき、これでもやく世界に主要な敵がいなくなった、と思い始めました！アメリカ人は最新のガスマスクを入手するために政府機関の外で並ぶことはありませんでしたが、最近のイスラエルでは人々がそうしているのです！

化学・生物兵器、原爆、水爆などの大量破壊兵器が発明されるまで、人類の絶滅があり得るといふキリストの預言は理解されませんでした！現在、ロシアはまだ2万5千発の核弾頭を所有しています。核燃料がイスラエルの怨敵であるイランやイラクなどの国々に密かに持ち込まれています。(イスラム教国家)パキстанは、核爆弾を所有し、核実験を行うと脅しています。

最近のエルサレム・ポスト紙に「イランが核を所有している！」という大きな見出しが載りました。記事によると、イランはロシア人科学者が「保持していた」「数発の核弾頭」を旧ソ連から入手したようです。米国政府の顧問は、これが「事実であり、何年も前に」極秘書類を入手していたと認めました。

イランは、アラブ人ではありませんが(ペルシャ人です)イスラム教徒です。イランは、イスラエル人を絶滅させようとする様々なテロリスト組織をかくまい、支援していることが知られています。

かずおお くにくに かくへいき はっしや しよゆう べいこく えいこく
数多くの国々が核兵器とそれを発射するロケットを所有しています。米国、英国、フランス、ロシア、
ウクライナ、グルジア、インド、パキスタン、中国、そしてイスラエルといった国々です。南 アフリカ、
ブラジル、その他いくつかの国々も核兵器を所有していると考 えられており、先に述べたように、
イスラエルはイランがすでに小規模核兵器を所有していると考 えています。

ねんしよとう こくれんささつ かん か がく せいぶつ へい き ささつ ぼうがい さい しゅよう
1998年初頭にイラクが国連査察官の化学・生物兵器の査察を妨害した際、主要ニュース報道機
関は米国とイラク間に戦争開始が差し迫っていると大きく報じました。この時は、おそらく一時的に
せよ、コフィ・アナン国連事務総長がバグダッドへ速やかに入り、イラク政府からわずかな譲歩を
なんとか取り付けたことで湾岸戦争が回避されましたが、それは米国が大規模な空爆を予定して
いたわずか数時間前のことでした。

よげん とお せんそう うわさ なんじゅうおく しようひ うなが
イエス・キリストの預言の通り、これらのできごとは、「戦争の噂」が、何十億ドルという消費を促し、
ぼうだい かず せんぱく 航空機 ぐんたい どういん おおごと はってん しめ
膨大な数の船舶、航空機、軍隊が動員されるような大事へと発展しうることを示しています。それ
でもなお軽視する人達よ、この世界は、キリストがそうなるだろうと言われたように、大量破壊、
ぼうだい かず じんめい そんしつ だい き ぼ せんそう き き ひん
膨大な数の人命の損失という大規模な戦争の危機に瀕しているのです！

よげん きた わたしたち ひとびと おそ おお かんなん ちゅうい とき
ダニエルが予言した来る私達の人々を襲う「大いなる患難」に注意してください。「その時、あな
たの国の人々を守る大いなる君、ミカエルが立ち上がる。国が始まって以来、その時まで、かつて
なかったほどの苦難の時が来る。(これは歴史上最大の戦争の事です！)しかし、その時、あな
たの民で、あの書にしるされている者はすべて救われる」

ち なか ねむ もの おお もの め もの えいえん もの
「地のちりの中に眠っている者のうち、多くの者が目をさます。ある者は永遠のいのちに、ある者
はそしりと永遠の侮辱に(この予言で示されている時とはキリストが地上に復活し再来される時
です！)」

しりょぶか ひとびと おおぞら かがや かがや おお もの ぎ もの えいえん ほし
「思慮深い人々は大空の輝きのように 輝き、多くの者を義とした者は、永遠に、星のようになる」
(ダニエル書12章1-3 節)これは、神のあかしと警告というつとめに奔走した者への報いを示して
います。ひどい苦難と密接に関連していることに注意し、今後数年の報道機関の見出しに注意し
てください。

ぜんじんるい ぜつめつ かのうせい はな げんざい わたしたち じだい あんじ
イエス・キリストが全人類が絶滅する可能性を話されたとき、イエスは現在の私達の時代を暗示
されたのかもしれませんが！

げんざいわたしたち ちゅうもく よげん りかい こうはい
現在私達が注目している2つの予言を理解するためには、イエス・キリストが「荒廃をもたらすお
ぞましき者」と「エルサレムが軍隊に包囲される」時について警告された際に意味されたことを知る
必要があります！

だれ ぐんたい ころ
誰の軍隊が？なぜ？いつ頃？

ニコライ皇帝がバルカン半島からイスラム教徒を追い出すと言う口実で聖地を巡って小競り合いをしたクリミア戦争のように、現代の勢力は、違いを解決できず、平和に暮らすことが出来ずに憎しみあい争い続けるアラブ人とユダヤ人に「平和をもたらす」ためにパレスチナへ進攻するでしょう。神の力を持っていると主張する卓越した宗教指導者が自らそこに入るでしょう！その者は、聖書の「キリストに背くもの」すなわち「偽の預言者」であり、嫌悪すべき獣の軍隊に支援され、守られるでしょう。

以下は私達が今後数ヶ月、数年にわたって見守るべき主なできごとです。

- (1) 社会の崩壊、すなわち道徳と精神性の崩壊が米国、英国、連邦各国や北西ヨーロッパ民主国家で続いています。家族の崩壊、離婚の増加、「同姓」結婚、「同姓愛者の権利」を求める動き、「女性解放運動」、そして神について語ることを教育や法廷から排除しようとする法的な傾向などの多くの心の狭い動きによって、善悪の区別や私達が生かされている神の根本的な真理といった考えがむしばまれ続けていきます。子供達が日々テレビで見る不快な暴力を実行に移して大量殺人者になるような社会に私達は暮らしています！「わたしの民は、幼子に追い使われ、女に支配されている。わたしの民よ、お前たちを導く者は、迷わせる者で行くべき道を乱す」(イザヤ書 3:12)と神は言われています。何百万ものアメリカ人の家庭は「女性が家長」となり、何百万という子供達が、特に少数民族の間では、父親不在の家庭で育っています。

数十年前、非嫡出は恥ずかしく、罪深いことでした。現在、何百万もの非嫡出の子供達が未婚の母親の「家庭」で育っています。祖母に預けられたり、路上生活をしたり、中には母親が同じであっても父親が違うために会うことのない父親がいるという状況です。現在、有名なスポーツ選手や大富豪達が様々な女性に産ませた非嫡出子の父親であることを大っぴらに誇示しています。このような神を否定した堕落した社会は、放蕩、無法、不道徳という坂道を滑り落ちて行くでしょう。暴力と犯罪が数多くの近隣にはびこり、卑しむべき不正行為が社会、国、州、連邦政府を腐らせ、強欲な政治家が公金を使い込むことで国民の信頼を裏切るでしょう。私達の社会は崩壊し続け、最終的に「外からの敵」同様に「内なる敵」によって破壊されるのです。

- (2) 世界経済の膨らんだバブルがついに破裂するでしょう。主要国の株式市場が暴落して何十億人もが一夜にして財産を失います。米国や英国では「大恐慌」が引き起こされ、今なお残る失業や貧困を減らそうとしてきましたが、状況は悪化し、私達の街はバングラデシュのようになるでしょう。

- (3) こうして大量失業が起こると、過激国粋主義者の甲高い声が特にヨーロッパやドイツといった多くの国の街角に響き渡ります。

すでにドイツでは、様々なネオナチグループが残忍な暴力行為を行い、暴動を起こし、反政府デモを行い、外国人排斥の落書きをするなど極右の暴力急増しています。ベルリンでは、スキンヘッドの暴力の急増に対処する特別航空機動隊が組織されています。ドイツが深刻な不況に陥った場合は、警戒してください！

- (4) ヨーロッパ、ドイツ、日本など世界中で、混乱状態や急速に拡大する貧困や犯罪に対抗するために、軍事独裁政権が現れるでしょう。戒厳令が宣言され、市民権は廃止されます。集会、報道の自由は否定され、大規模な軍隊が編成されます。

- (5) ロシアや中国の軍国主義への警戒感からヨーロッパが統一されるでしょう。統一通貨や関税など残された困難は解決されます。最終的に、10カ国が経済、軍事力を一つの強大な力へと連合させます。(ヨハネの黙示録17章12-14節)

- (6) それがエジプトの指導者であるかどうか証拠はありませんが、「南の王」が連合した欧州勢力を「攻める」でしょう。おそらく、これは中東から欧州やその他の国々への石油の流れを断ち切ることが即時軍事行動をもたらすという意味でしょう。(ダニエル書11章40-45節)

- (7) 米国と英国は国内外から攻撃されます。抑制のきかない犯罪や暴力、人種間戦争など完全な混乱状態に苦しみ、国民は経済の崩壊や生物・化学兵器、核兵器の使用に対する脅しや実際の使用という複合的な打撃に耐える備えができませんでしょう。預言された「大いなる患難」(マタイによる福音書24章21、22節)が始まるのです。

- (8) 卓越した偽の預言者は、自ら「平和の王子」という神の肩書きを称し、「真の教会」の本拠を生まれ故郷、エルサレムへ戻すのだ、と言うでしょう。いつか、おそらく上記の(6)以前に、エルサレムに「寺院」が建てられるかもしれません。正統派ユダヤ教徒が岩のドームとアル・アクサモスクをユダヤ寺院を建てるために破壊すれば、アラブ諸国全てが連合して大戦争が起こるでしょう。その時、アラブ諸国は、生物・化学兵器をユダヤ人に対して使用するかもしれません。ユダヤ人が絶滅しないように、生き残ったユダヤ人を「救う」ことを理由にして、ヨーロッパが中東に介入するでしょう。偽預言者と欧州連合軍によるこの動きは、まさに、「荒廃させる憎むべきもの者」と「エルサレムが軍隊に包囲される」というキリストの預言を実現するものです。

- (9) この大規模戦争の直後、次に獣の勢力が中東を侵略し、ロシアとおそらく中国を含むその同盟国が報復する恐れがあります。(ダニエル書11章40-45節)何百万という軍隊がメギドの周辺地域に進攻し、「世界最終戦争(アルマゲドン)の戦い」を招き、(ヨハネの黙示録16章12-16節)それは、天の印によって止められるでしょう(ヨハネの黙示録6章)

(10) 神はキリストに戦いを挑もうとした獣に7つの災いを送られます。イエス・キリストは最後の7つの災いのうちの7番目とともに地上に降りられます。(ヨハネの黙示録19章)

イスラエルのユダヤ国家を待ち受けているものは、ひどい苦難の時なのです！エルサレムで引き金となるできごとが主要国を互いに争う戦争へ引き込むでしょう！ダニエルの預言に書かれているように、多くの国々が転覆させられるでしょう。アメリカ合衆国が迎える苦難に、日本は関係ない、と除外してはいけません！

これまで見てきたように、中東紛争の根源は、過去という土壌に非常に深く埋められています。イサクとイシュマエル、モーセとアモリ人、ダビデとペリシテ人、バビロン、ペルシア、ギリシャ、ローマの時代までさかのぼるのです。紛争は、初期のイスラム教徒がパレスチナやエジプトへ侵入した時、第一次世界大戦後に英国がパレスチナを委任統治した時、1948年にイスラエルが建国を宣言した時、1967年のイスラエルとアラブ近隣諸国との6日間戦争の時へと、さかのぼるのです。紛争の根源はとても根深く、人間が講じる「和平協定」は成功しないでしょう。それゆえ、この、戦火にまみれた、憎しみに燃えた世界に、真の「平和」をもたらさる唯一の存在の最終介入がなければ、エルサレムに平和など来ないでしょう。その唯一の存在とは、ナザレのイエス・キリスト他にないのです！

現在の報道機関の見出しから目を覆って逃避し、これらの事柄はすべて現実ではなく、「切迫したもの」でもないという「ふり」をし、自らを愚かしめている人は、とても荒々しい衝撃を受けるでしょう。

「世界最終戦争」は具体化しつつあります！その時は近づいており、「世界全体」に被害を及ぼすでしょう！イエス・キリストは私達全員に警告されました。「これから起ころうとしているすべての事からのがれて、人の子の前に立つ資格があると見出される様に、絶えず目をさまして祈っていない」（ルカによる福音書21章36節）もし、「あなた」が、キリストによる人間の事象への介入と、キリストが目撃されるであろう最後の日々、神の奇跡に参加するために選ばれた者ならば、あるいは、「あなた」が、「見張り人」（エゼキエル書33章）のつとめをはたしたいと願うなら、ただちに、お電話もしくはお手紙で、ご自宅の近くの主催団体もしくは公認教会の名前と電話番号をお問い合わせください。

— 終 —

この資料は、変更することなく無料で著者と出版社に配慮した上で、コピーして友人や家族に配布することができます。一般大衆向けに出版することはできません。

この出版物は個人的な研究の道具として利用されるよう意図したものです。どんな内容でも人の
言葉を受け入れるのは賢明ではないということを知っていただき、全ての問題をあなたの聖書の
中から自分で証を立てるようにしてください。

ガーナテッドアームストロング福音協会

私書箱 747 Flint、テキサス 75762

電話番号: (903) 561-7070 . Fax: 561-4141

当福音協会のウェブサイトで多くの文献が無料で入手できます

www.garnertedarmstrong.ws

ガーナテッド・アームストロング福音協会の活動は、キリスト教徒とイエス・キリストの教えに従って
福音を説く協力者からの自発的な十分の一税、奉納及び献金で成り立っています